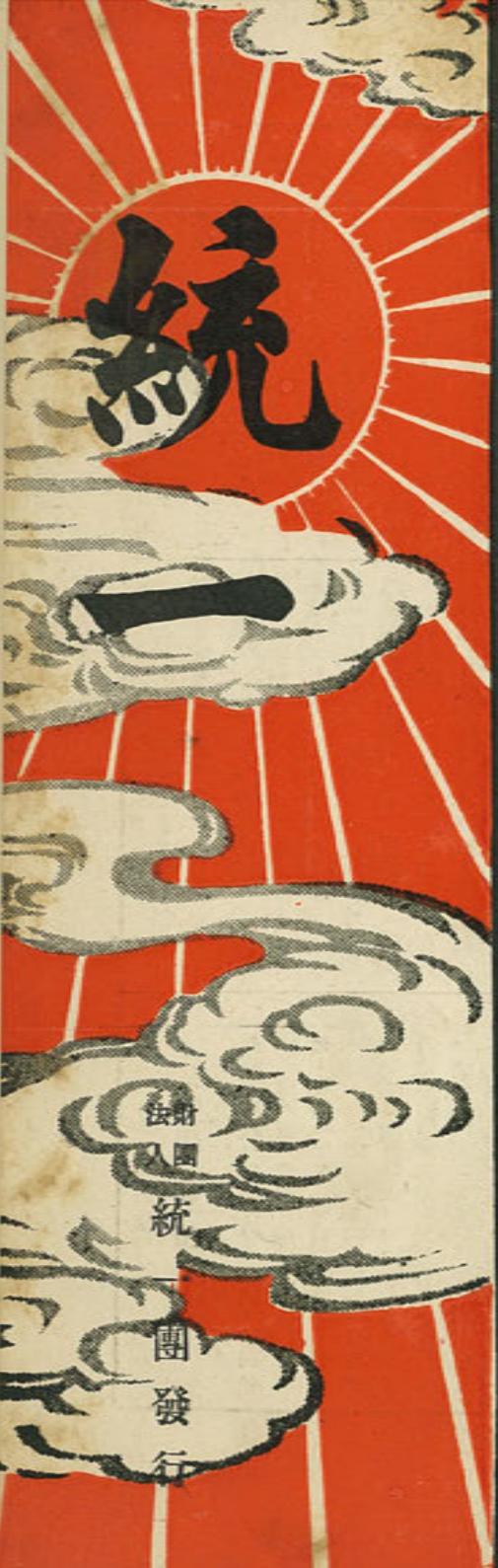


# 次 目

- 佛教の根本と其の應用(其十五).....本  
開目鈔講話(第卅一講).....小  
肇國神話(一).....岩  
軍人と日蓮主義.....岩  
通力と正信解.....磯  
記事

多林野潤部  
一日満經直  
郎生英夫事

○本部團報 ○萩支部報 ○福島支部報  
○團費誌料寄附金及維持費領收



## 財團統一團趣旨

統一團ハ創立以來實ニ四十有餘年ヲ經過ス其間内ニ佛祖正脈ノ法統ヲ闡明シ外ニ我國精神文化ノ精髓ヲ宣揚シ能ク萬代不易ノ大道ヲ擁護シ又能ク時代對應ノ教化ヲ旺盛ナラシメ以テ文化ノ向上發展ニ貢獻セリ此ノ光輝アル歴史ハ決シテ他ノ追随ヲ許サム所ナリ

統一團ハ本團自身ノ活躍ノ外本國方母體トナリテ幾多ノ子會ト事業トヲ産出セリ其ノ首ナル者ニ就テ見ルモ天晴舍アリ地明會アリ講妙會アリ自慶會アリ又知法恩團會等アリ其街頭宣傳ノ如キ炎々タル道念ヲ喚起シ多大ナル感動ヲ與ヘタルヲ見ン又著述出版ニ於テハシ來レリ

統一團ハ過去ニ於テ如斯多大ナル法勳

ヲ有スル名譽アル正定聚ナルガ創立者本多日生上人遷化後其遺命ヲ遵守シ進

ンデ法人組織トナシ新ニ本部ヲ建設シ將來ニ向ツテ重大ナル任務ヲ敢行ゼン

ト欲ス 其中心ノ事業ヲ舉グレバ

第一佛祖正脈ノ法統ヲ擁護スル事 第

二我國精神文化ノ精髓ヲ體系的ニ發揮

スル事 第三此ニ適當スル學風ヲ振起

スル事 第四時代對應ノ教化ヲ研討シ

スル事 第五小ニシテハ我國文教ノ爲

蓮門下ノ爲メ大ニシテハ我國文教ノ爲

ニ毎ニ覺醒ヲ促シツ、嚴然トシテ統一

ノ學風ト教化トヲ守持スル事是レナリ

教旨ノ正明 研學ノ潤達 活動ノ旺盛

此等ハ統一團ノ標語ナリ

## 本團署則

◎目的 本團ハ日蓮教學ノ心髓ヲ闡明シテ佛祖正脈ノ法統ヲ擁護シ我國精神文化ノ精髓ヲ發揮シテ國民精神ノ根柢ヲ培養シ立正安國ノ大義ヲ宣揚シテ以テ理想ノ文明ヲ建設スベク街頭布教並ニ教誨演會ヲ開催シ又月刊雜誌「統一」ヲ發行ス

◎維持員 本團ノ事業ヲ贊同シ一時金參百圓以上又ハ毎年金拾圓以上ヲ寄附セラル、方ヲ維持員トス

◎贊助員 一時金百圓以上又ハ毎年金五十圓以上ヲ寄附セラル、方ヲ贊助員トス

◎正團員 一時金參拾圓以上又ハ毎年金五百圓以上ヲ正團員トス

◎入團 諸希望ノ方ハ宿所氏名ヲ明記シ適當セル金額ヲ添附セラルレバ本誌ヲ無料ニテ頒布シ團章壹個ヲ贈呈ス

◎誌友 本誌ヲ購読スル方ヲ誌友トス

## 佛教の根本とその應用

(其十五)

### 本多日生

#### 德育の根本義

そこに於てこの人格の頑廢、德育の不徹底といふことに關して、この時代の病弊を救濟して、人々がスラリとこの道德の感化を受けられるやうに、學校へ行くところの兒童は男女共に皆穆々たるところの德性を養うて来るやうにしなければならぬ、それには佛教の感化を與へさへしたならば、學校で骨折つて居られるところの德育が效果をグン／＼奏して來ることになるのである。さうしてその事は必ずしも學校ばかりに註文を申す譯ではありません、先づ日本人の家庭に於て考へなければならぬ。學校の先生はえらいけれども、學校の先生が黒板の前で教へるだけが人格を造るものではないので、儒教で言へば天道、惟神の教で言へば教神、佛の教で言へば信仰、これあつて初めて人間の基本人格が出來て、その上に學校の先生なり、修養なりいろいろの事が現はれて來るのである。その源を塞いで置いてさうして德育をやらうとしても效果は舉らないといふことを、家庭に於て皆了解しなければならぬ、すべて佛教を

信する者は何れの宗派を問はずして、釋迦牟尼の教を信する者は、今日の德育を信仰より説かずして、唯だ表面から人間を導かんとして居るところの方法は謬つて居るといふことを以つて、佛教徒は社會に當つて行かなければならぬと思ふのである。その點は最も明瞭に説明して行かなければならぬ、それが爲には命を懸けて聞つたら宜いのである。

### 合 理 的 布 教

この德育の問題、人格の問題に關して、時代の要求は猛然と興つて來つゝあるのであるから、その準備をして置きさへしたならば、その機運と同時に佛教も復活もし、又役立つことに相成ると思ふのである。それ故に信仰の説き方は、信仰は無論萬事の根本を成すのであるが、その信仰に依つて人格といふものが善くなり、その結果が御利益に現はれて來るのである、信心をするから人格が善くなり、精神がシャンとして來る、隨つて下らぬ事を心配しなくなるからヒステリーにも罹らない、氣が活きくして居るから商賣にも精を出す、商賣に精を出すから店も繁昌して行くといふ風に、信仰、人格、さうして效果といふものが現はれて來る、斯う説かなればならぬ。唯だ信仰だけを神祕的に説いて置いて、人格の問題を度外視にして置いて、人間はわからずやで愚闊だけれども、商賣は金が儲かる、養生はせんけれども健康になる、顔は真黒だけれども良い嫁が來て呉れる、斯ういふ事を言ふから間違つて來るのである。

である。信心して居るから人格が善くなり顔が活々として、鼻は低いけれども誠に善い人相ちや、それだから良い嫁が來ると、斯う言へば尤もだけれども、顰め面をして色の黒いのに良い嫁が飛んで來る、それは信心さへして居たら飛んで來るといふやうな事を言ふ、そんな不合理な事を以つて社會を導くといふことは間違つて居る。今後はどうしても教育ある者が首肯し得られる方法に依つて説明して行かなければならぬ。だから信仰、人格、さうして御利益、斯ういふ事が佛教の教である、一番大きなものは人格である。信心をする者はその日から即ちその人の人格が整つて來る、眞の幸福は人格を通してのみ得られる、眞の成功は人格を通してのみ得られる、眞の健康は人格を通してのみ得られるといふ、この人格の問題に信仰を説いて行くといふことが、これが時代の要求である。

日蓮聖人はどうかといへば、申す迄もなく日蓮聖人の人格はまことによく整つて居る。日蓮聖人の教も立派だけれども、人格の發現されて居る事が實に誠心を磨いて、智仁勇の三徳各方面が燐爛として光輝を放つて、さうしてあの通りの立派な活動を現はされた、眞に人格の模範者であるといふ方を日蓮主義者は戴いて居るのである。決して日蓮聖人は沒分曉漠のドンドコ法華のお祖師様ではない、大人格者の先輩としてのお祖師様であるといふことをよく考へなければならぬのである。

更に大事なことは人生問題であります、生活問題と申しても宜しい、廣い意味に於て言へば人生問題であります。ザラツベシの所で言へば生活不安とかいふやうな事を言ふのでありますけれども、生活だけが人生ではありません、生活は安定して居つても人事百般の事がそこに起つて來ます、食ふには困らぬけれども娘が體が弱いとか、商賣は繁昌するけれども親父がだらしがないとか、嫁は非常に縦皺は良いけれども少しどうも浮氣者だとか、或は新しがりで髪の毛を断つて断髪にしてしまつたとかいふやうな事があつて、なか／＼復雜なる人生を展開するのであります。決して生活といふ事だけが人生を要ふものではありません、世の中の人は非常に生活といふ事だけを重く考へて居るけれども、單純な生活だけならば心配はないのであります、やはり細君が虚榮心が強かつたり、亭主がだらしがないといふ事が伴つて、生活不安といふことがあるのであります、單純に切離されたる生活だけであるならば、大した不安といふものではありません。人生に處するところの事柄が根本に於て謬つた觀念がさかんであるが爲ません、人生問題であります。人生に處するところの事柄が根本に於て謬つた觀念がさかんであるが爲めに、いろ／＼煩悶多き人生となり、往いて生活も不安になり、生活不安の爲めにはそこにいろ／＼な犯罪が起り衝突が起り、遂には社會問題を喚起すといふことになつて來るのであります。

この人生問題の指導といふ事は今日の往き方では完全にいくまいと思ふ、今の政治に託し、今の學説に託して進んで行つたならば、益々人生は煩悶の巷となりはしないかと考へるのであります。それは何

故かといふと、やはり是は人間生活の理想が偏つてしまつて居るのである。大體は物質欲に走せ、物質生活に傾きかゝつて、精神の領土が狹められたて来て居ることに依つて、人生は煩悶多く不安が多いといふことに相成るのであります。政治上からしてこの人生の煩悶不安を除く、そんな事はナカ／＼言うて居つても効能は現はれて來ない、或る達人が言うて居る、西洋でも毎年々々議會を開いて政治家は年がら年中政治に依つて斯うしてやる、あゝしてやると言つて政策を開はして居るけれども、どの黨派が出ても五十歩百歩であつて大したうまい事はない。日本でもさうである、政友會の内閣が倒れて憲政會が出た、良いといへば良いやうなものだけれども別段大した事もない、今度或る黨派が代つた、果してどれだけ變つて來るか、『代りまして代り榮めございません』……といふやうな事になるものである。政治といふものは、少しの所を見て居れば甚だ氣が利いたやうな事を言ひ居るけれども、達觀した時に於ては『此處までお出で、甘酒進上！』といふ甘い言葉であつて、其處まで行つたら甘酒は無い、斯ういふことになるのである、併しまア折角隨いて來た者に全然やらぬ譯に行かぬから、少しづゝ何物かを與へて行くことに歸するのである。吾輩は決して政治全體を呪ひはせんけれども、政治だけを重い事に考へて、赤ん坊が母親にあやされてヨチ／＼と歩くやうに、國民が政治家の言ふ通りに隨いて行つたならば、甘酒が飲めると思つて居るならば、それは餘りに幼稚であるといふことを言ふのである。

そこで政治は政治としての利益はあるけれども、一方に自分の精神の領土を啓く事をさへすれば、即時即刻そこれ煩悶を解説し、不安を除却するところの妙法があるのである。それが併んで行かなければいかぬ、政治や經濟や社會のいろ／＼の施設と、自己の精神の啓發と相俟つて人生といふものは圓満に行くのである。昔はあまりに精神の方ばかり言ひ過ぎた、その反動で今日は政治や經濟や社會識識といふ問題がやかましくなつて來たけれども、今日のやうに法制經濟社會といふ事ばかりやかましく言うてもいかぬのである。それは精神の内面の方と外部の施設の方と、内外相俟つて初めて人生といふものは善良に進んで行かなければならぬのである。そこで外側を改善して行くことに反対するのではないが、外側ばかりに引摺られ過ぎて居る。だから今日を匡正するのは佛教かやらなければならぬと申すのである。

然らばどうしたら宜しいか、それは精神の領土を啓けば宜いのである、精神の領土を啓くといふことは、錢の要らない事で面白く愉快に暮せるやうに心を組立て、行くのである。美味い物は食へなくとも錢は無くとも、金の要るやうな事でなくとも幸福を感じ得られる方法といふものが啓かれれば、精神の領土を開拓したといふことになるのである。現代の人の幸福といふものは鮒を食ふとか、活動寫眞を見るとか、紅葉狩に行くとか汽車に乗つても三等ではいかん、二等にする、汽車から降りたら自動車に乗る、料理屋へ着いて茶代を出すといふことになるから錢ばかり要るのである、それでもやはり不足を感じ

じて来るから、紅葉狩に行つたけれども大して面白い事もなく、歸つて來たら墓口が空っぽになつたといふので青息吐息……斯ういふことになる。毎日々々やつて居る事がさういふ事を繰返して居るのである。偶には錢を使って遊ぶのも宜いけれども、それは一番拙い方法である、錢要らずに愉快を感じするといふ事が人生に於て研究されて行かなければならぬのである。何故その研究をしないか。

それはどうすれば宜いかと言へば、即ち低い所から言へば自然に對する感情を養ふのである。自然に對する感情といふのは、花を見ても月を見ても愉快な感興を覺えるやうに、或は朝起きて顔を洗うた時でも、晴れ渡つた大空を見て快い氣分になるやうに自分の精神を訓練するのである。

### 朝 みどり澄み渡りたる 大空の

廣きをおのが心ともがなす。千葉千子園子を與へず其は美しのうと  
さしのぼる旭日のごとく爽かに

もたまほしきは心なうはり。萬葉次子丁度要あらべ 平生せざ  
と明治天皇の御裏に歌はせられた通り、お日様を見ても、そこに自然の美といふものを感じなければダメである。或は紅葉を見るのでも、必しも箱根の紅葉、鹽原の紅葉を見に行かなくとも、庭の隅の一本の紅葉の木が真紅になつて居るのを見て、「あゝ美しいナ」と思つて見れば、それは百本、千本の紅葉を見るも同じことである。それを一本ぐら見てても仕様がない、どうしても鹽原へ行かなければ紅葉を

見たやうな氣がしないといふから、そこでサア汽車賃が足らぬとか、女房が文句を言ふとかいふことになつて煩悶を起すことになるのである。隣家の庭からこつちへ出て居る紅葉の枝一本でも構はない、その紅葉の葉を見て、『あゝ自然の美といふものは美しいものぢやナ』といふ、その愉快な心持を殖やす稽古をして行けば宜いのである。即ち自然美に對する人間の情操を涵養することである。

それは子供の時分から導いて行けば誰でもサウなるのである。諸君がやつて御覽なさい、平生から子供に菊の花なり梅の花なりをやつて、『お花はきれいですね』と言つて教へれば、子供は正直だから、『きれいなお花』と言つて喜んで持つて居る。それを親からして菓子や團子ばかり與へて花が美しいといふやうな事を少しも教へないから、子供は花などは抛つて置いて團子の方へ手を出すやうになる、平生の繫け次第では子供は團子よりも花の方が良いといふやうに直ぐなるのである。その風尚、品格といふものが墮落することに於て、人生は煩悶多く、不安を増すものであるといふ、この大きな自覺を持たなければならぬのである。

古來賢者哲人の教ふる所はみな一つである。如何なる富貴家庭と雖も、自然の美を味ふことの出来ない人であるならば眞の幸福はない。どれ程或金となつて富百萬を算ふる人でも、この自然美を憚れることが出來なければ、風景の佳い所へ行つてあり好い景色だナと人が言つても『景色なんか何だい、それより俺は腹がへつた』といふことになつてしまふ。音樂會へ行つて音樂を聽いても、何だい『音樂

なんか、うるさくて仕様がない、俺は早く酒が飲みたい』と言つて、むやみに飲んだり食つたり、さうして腹を壊して宿酔で呻吟つて居るといふことになつたならば、眞の幸福といふものはない。人間の最後の幸福は即ち自然美である。大きな邸宅を備へて人に誇るナンといふことは極く詰らない精神が籠つて居る。それよりも狭い庭の隅にある一輪の花でも、隣家の庭から出て居る一枝の紅葉でも、そこに天然自然の美を味ふといふことを訓練して行くのが眞の意義ある人生である。

お釋迦様は非常に花を愛せられた、だから何處へ行つてもお釋迦様は花に包まれて居る。その花も澤山は要らない、花は一輪で宜い、說法せられる場合でも、そこに花が一輪挿してあれば、それを題材として抑々この花の美は……と言つて、自然の美から併せて宗教の情操を啓發せられたのである。それが後世に傳はつて、どんな貧乏な家もお佛壇を置いてあれば、そこには必ずお花を三錢でも五錢でも買つて上げるといふ風が遺つて居る。それは何も五圓も十圓も出して花を買はんならぬことはない、裏庭にある花一輪持つて来て挿しても宜いのである。

日蓮聖人が身延の山に入られて

紅葉いつしか色深うして絶え／＼に傳ふ懸樋の水に影を映せば、名にしおふ龍田の川の水上も斯くやと疑はれぬ。

と仰せられたのも、それは唯だ竹を割つて懸樋にせられて居るその水に、紅葉の葉が二枚か三枚映つて、

居るのである、その紅葉の色を見て、龍田の川の水上も斯くやと疑はれぬといふほど雄大なる美を感せられた、そこが偉いのである。

軒にすだくさゝがにの糸玉を連さ蜘蛛が軒端に巣を張つて居る、その巣に露が溜つてお日様の光にキラ／＼輝いて居る、それを見て帝釋天の喜見城に比較して嘆稱せられたのである。これならばいくら貧乏人でも、蜘蛛の巣ぐらるは何處にある譯であるから、金を懸けなければ樂みがない、美が感ぜられないといふ事では駄目である、その自然美に對する悦びを啓いて來るのが精神の領土を開拓することになるのである。

### 道徳的の感激

それがモウ一つ進んで上等の所に行くと、今度は道徳的の感情といふものになる。子供であれば、今日は朝から學校へ行つて先生に斯ういふ善い事を習つて來た、一日學んで一日賢くなつたといふことを、日の暮に於て喜び、商人は一日の業務を終つて、今日も正直に誠實に一日の商賣を終つたといふ事を喜び、會社員や勤人であれば一日の勤務を終つて、今日の一日を眞面目にその職務を果したといふことを喜び、各々一日爲したるところの行為に對して喜悅の心を持つて行く、それが即ち精神生活といふものである。何も家に歸つて焼芋を食ふから嬉しいのではない、一日無事で學校で學問をして歸つて、

自分がそれだけ精巧になり立派になつて、親に對し世の中に對する務めを盡すことが出来るといふことを喜ぶならば、これは非常に清い尊い事である。その日の生活に於て前申すやうに自然美に對する感情を養ひ、さうして道德に對する感情を養つて行くことが出來たならば、それが立派な精神生活である。

### 宗教的の法悦

モウ一大切なのは宗教に對する感情で、これは何時如何なる時でも自分の心の中に尊き佛様を描いて、さうして慰藉を受け、教導を受け、いつも母の如く姉の如く柔軟なる慈悲を與へて下されるといふことに喜悅を持つのである。例へば汽車に乗らうと思つて停車場へ行つたところが、僅かの事で乗り遅れて次の汽車まで待ちぼけを喰はざれる、「あゝ一足違ひで汽車が出てしまつた、詰らぬ事をした、ああ損をした」と思つたら煩悶になるけれども、そこを「乗遅れたものは仕方がない、まあ宜いワ」といふので、落着いて腰をかけて、さうして宗教の情操に生きて居れば、その二十分、三十分の待合せる時間は却つて落着いて宗教の悦びを味ふことが出来るのである。私はいつでもサウ極めて居る、時間に間に合はないで汽車が出てしまつたと思つたら、あゝ詰らぬ事をしたと思はないで、「これはうまいナ」と考へるやうに工夫をした、あゝ詰らぬと思つて地圖本踏んだつて誰も褒めて呉れる譯でもない、どう

する事も出来ない、唯だ自分の心持がイラ／＼するばかりであるから、「これはうまい、僅かの時間で  
も何も仕事をしないで宜い時間を與へられた事はこんな愉快な事はない」と考へることにして居る。汽  
車に乗つてもサウである、これから八時間も十時間も搖られて行かなければならぬ、大分長いナと思ふ  
と嫌になるけれども、ゆづくり色々の事を考へたり、落着いて眠つたり、自由に出来る時間を與へられ  
た、こんな幸福な事はないと考へるのである。

そこが宗教生活の味ひであると思ふ、日蓮聖人が佐渡ヶ島の雪の中に御在になつても、過ぐる時刻  
も程あらず、是ほどの悦びはないと仰せられる所は、即ちこの人生の煩悶を宗教の力に依つて解決して  
行くのである。さうなると人は各々分に應じて幸福を感じることが出来るので、貧しければ貧しい儘、  
不運なら不運の儘、その中に又悦びを感じて行くことが出来る。運の好い人も、富める人も、皆それ相  
應の悦びを感じるのである。天氣が良かつたら天氣が良いで、『今日は天氣が良い、誠に結構だナ』と  
悦ぶ、雨が降つても『ナ－ニ此の位の雨は降つたところが大した事はない』といふ風に對抗してやつて  
行く、そこが精神の領土を啓いた效果である。精神の領土を啓かね者になると、『こんな良いお天氣に  
講演などを聽くより鹽原へでも行けば宜かつたナ』と言つて不平を起す、ちょっと雨が降つて来れば、  
『こんな日にお寺にお詣りなどするのは詰らない』と言つてアツ／＼言ひ出すことになる。そこに信仰  
が加味して居つたならば、天氣が良くとも、雨が降らうとも、何事につけても善い方にその精神が働い  
るのである。

### 人 生 の 根 本 方 針

て行く、それは少しの心の持ち方である。貧乏の家庭でもその通りで、亭主なり女房なり兩方の心得が  
そこにあるさへすれば、亭主は女房が粗末な御馳走を捨てる爲めにガタ／＼やつて居るのを見て、『假  
令御馳走ば不味くとも俺の爲めに一生懸命にやつて呉れ居るナ』といふ感謝の精神になるから、女房も  
亦『こんな詰らぬ物でも良人はニコ／＼して食べて呉れるワ』といふことになつて、そこに悦びがある  
のである。

左様にして行けば煩悶もなく、随つて生活の不安といふものも必ず除かれるのである。今日生活の問題は決して此の儘では除かれないと世間の人は言ふけれども、さうではない、必ずや社會の人々の精神狀態が改まり、随つてそれが政治上に經濟上に反映して參つたならば、人生はモット／＼豊かな、幸福な人生を造ることが必ず出来る。その他の方法に依つて社會を顛覆したからと言つても、各人の人格が頗廢し、人生問題に就て物質慾のみ高まつた社會に於ては、幾度革命をやつて顛覆しても眞の幸福は來らないといふことを教へるのが佛教である。佛教は下らない社會運動の提唱を持ちをしたり、人生の戀愛問題の先棒を擔いだりする必要はない。何處までも宗教の本領を以つて、堂々と人生問題を解決し、社會問題を指導して進んで行く所に佛教の使命があると私は思ふのである。

尙ほ之れに續いて社會問題、國家觀念、文化の理想といふやうな大きな問題が茲にある譯であります。が、それ等に關してもそれ／＼佛教の應用が非常に緊切になつて來たと思ふ。私は何と言つても今日は佛教が各派に役立つ時機が來たと確信するのである。佛教が我國に渡來以來千三百七十餘年、今までにこそ佛教の旺盛な時代はあつたゝ、それは或は奈良朝であるとか、平安朝であるとか言つて、よく人が羨しがるけれども、私はサウは思はない。それ等の時代の佛教も旺盛であつたらうけれども、併しその必要の自覺は今日ほど眞剣ではない。今日は上來申すやうに知識の上から、道徳の上から、生活の上から、社會問題の上から、國家の經済の上から、文化の理想の上から、堂々として佛教を迎へ來らんと

するのである。即ち佛教渡來以來、初めて眞に意義ある佛教の發揚宣傳が茲に與りて來るのであつて、今日まで多くの先師先輩が努力せられた佛教に對する貢献よりも、モット大きな意味の仕事が今日及び將來に遺つて居るといふことを考へて、お互に奮闘努力したいと考へるのであります。

尙ほ今申した最後の三つの問題に就ては、講を重ねてお話をしたいと思ひますが、どうぞ我が統一團員諸君は大きな佛教護持の誓願を自覺して、各自分に勝へたる事に依つてこの佛教の大使命を果す上に貢献したいと思ふのであります。この決心を以つて日蓮聖人の御會式に際して御恩報じの意味に捧げ奉る次第であります。（此項了）

憂國慨嘆の人士の間には宗教なるべからずとの自覺を生ずるのである。只己さへ宜ければ宜いといふ小人の間には、宗教の必要が自覺されない、此の缺陷多き社會を救つて行くのには、精神的慰安を與へて人生の哀れな者を慰め、又精神的感化に依つて社會の潤滑を救つて行くには、精神的慰安を與へて人生して居る。又社會の生存競争が激甚になるに従つて、宗教の必要が強くなつて来る。生活の競争が激甚になつて來ると、人間の心に餘裕がない、それが爲に色々衝突的の狀態を現するのである。宗教は其調和力となつて此の人生を圓満に導き、其衝突を緩和して行くのである。

# 開目鈔講話

(第三十一講)

一六

## 小林一郎

この間は法華經と他の經と比べて見て、他の經にも、この經が最も勝れて居るといふことを説いてあるのだから、法華經と他の經との違ひが何處にあるかといふことは明かでないといふ問題を持出して

それに就てモウ少し立入つた解釋をされるといふところでありました。それでいろいろ經典を調べて見たり、勝れた學者の説などを比べて見ると、どこに法華經の最も勝れた點があるかといふことが明らかに判る。斯ういふ所までを讀んで居りました。今日はその續きであります。

今眞言の愚者等、印、眞言のあるを待み

この前に申ししたやうに、眞言宗で大事にして居るところの大日經と法華經と比べて見て、眞言宗の方では、大體に於てその趣意は同じだと言ふ。大日經の方では大日如來といふ一人の佛様、これが世界にたつた一つある佛様で、その大日如來が場合に應じいろいろな佛になつて現はれて、世の中で教をお説きになるのだと言ふ。法華經の方では、壽量品に

ある如來、即ち本佛といふ一つの佛様があつて、その佛様が釋迦牟尼佛ともなつて現はれれば、又他の佛ともなつて現はれる。斯ういふのですから、そこだけを比べれば兩方似たやうなものである。根本一のものがいろ／＼になつて現はれるといふ點だけは同じであるけれどもよく立入つて考へて見ると、その大日如來といふものに就ての説明と、それから法華經の中に説いてある如來、即ち本佛に就ての説明とは非常に違ふのでありますけれども、それはよほど深入りして考へないと判らないので、一應見るところでは根本に一つの佛様があつて、それがいろ／＼に現はれたかと云ふから、その大日如來といふのも、法華經にいふ本佛といふのも結局同じものだ。一つのものを方々から見ていろ／＼に名けたに過ぎないだらう。斯ういふ解釋は出来る譯です。假た所を捉へていへば、皆似た所はあるのですから、この頃のやうに比較研究といふやうなことが盛んに

なつて来て、何でも比べて見て似た所を探すことになると、結局どれも似たものだといふことになるのです。人間でも、人々顔が違ふけれども、上方に眼があつて、眞中に鼻があつて、下方に口があるといふことは皆似て居るから、似て居るといへば皆同じものになる、標識の良いも悪いも無くなつてしまふ。教に於てもその通りであります。若し似た所だけ捉へていへば、大概は似たものになるのであります。しかしながらさういふ事では吾々の一生涯の信仰の土臺にはならない。大體似たものだといふだけではいけないので、吾々は何とかして本當に總ての迷を除いて、眞に人生の意義を辨へた者になりたいのですから、その教の中に少しなりとも足らない所があつたり、又間違つた所があつたりすれば、その教に依つて自分の信仰を決するといふ譯に行かないのですから、大概同じものだといふ譯には行かない。そこでどうしてもこれは深く考へなければなら

んのあります。が、ソイ經文に現はれた所だけを比べて、似たものだといふことになれば易いのであります。それでその大體似た所を比べて見ると、法華經と大日經とは似て居る。法華經に『如來秘密神通之力』とあるその如來といふものと、大日經に現はれて居る大日如來とは大體同じものだ、一つの佛様を違つた方面から解釋し説明したのだといふことになります。

若しさういふやうにこれを同じものだとして見ると、法華經よりは大日經の方が勝れた經だといふ議論が立つのであります。それは何故かといふと、法華經には成程さういふ唯一の佛様があるといふことは判つて居るけれども、その佛様のお力と吾々の心の力と通ひ合ふやうになるにはどうしたら宜いかといふ、その實際の方法に就ては、法華經には別に何も示してない。ところが大日經といふものは前半分が佛様の説明で、後の半分はその佛様を祀つたり

祈つたりする方法を説いたものである。これは随分面倒な事が細々と言つてあります。要するに佛のお力と自分の心と通ひ合ふやうになるのには、どういふ道に依つたら宜いかといふことを説いてあるのあります。それで大日經の中に説いてあるところに依れば、體密、口密、意密と言ひまして、體、口、意の三業が一致しなければいかぬ。密といふのは、『深い』といふ意味で、體に行ふ所も勝れた行ひをする、口に言ふ所も奥深い言葉を言ふ、意に思ふ所も奥深い道理を考へる。この三つのものが一致するやうにならなければいけないといふので、眞言宗の方では三密相應といふのです。

この點は宗教としては大事なので、法華經の方でもこの點だけは同じやうに言ひます。口に言ふ所と、意に思ふ所と、身に行ふ事とが一致しなければいけない、この三つがちくはぐになつた時には、人間の一生涯といふものに統一が無い譯でありますか

ら、身、口、意の三業といつて、この三つが一致しなければならんのは無論の話であります。ところが心といふものは眼に見えないから、心をどういふ風にして正しくしたら宜いかといふ、その方法が難かしいのです。向ひ合つて居つても人の心の様子は見えない。又自分でも自分の心の中をよく振返つて見て、今どんな心持を有つて居るかといふことをシリカリ突止めることは難かしい。口に言ふ事と身に行ふ事とは、形に現はれるのですから、その方を慎んで、さうして口に言ふ事と、身に行ふ事とに依つて自然に心を制して行くやうにするが宜しい、斯ういふことになるのです。これは宗教でも倫理道德でも同じであります。が、さうなればならん筈であります。私が題目を唱へるのでもさうであつて口に題目を唱へて、それを心に信じて、さうしてその口に唱へること、心に思ふことが行ひに現はれて来るといふことなのであります。それでなければ、

たゞ口先ばかりでは大して意味がない譯であります。ですから宗教としては身と口と、即ち言葉と行ひに現はれる所を慎んで行かなければならんといふのは無論の話です。これが哲學になると、哲學は理窟ですから、哲學者は主に心の中の問題ばかり論じて居りますけれども、宗教といふものは生きた人生に關係のあるもので、宗教に依つて世の中を善くしなければならない。固より心が一番根本ですけれども、心は眼に見えないから、目に見えるところの身と、耳に聞えるところの口に言ふ言葉を慎んで、これに依つて心をシリカリ立てゝ行かう、斯うなる譯です。これは大事な事であります。ところがだんだん世が末になつて來ると、その點をいゝ加減にして置いて、たゞ難かしい教理ばかり研究して理窟を云つて居りますけれども、たゞ理窟が解つたからと

いつで、直ぐ行ひに現はれるとは云へないのですから、これを行ひに現はすやうに、又口に言ふ一つの言葉の深い意味が現はれるやうにするといふのであります。この點は宗教としては最も大事な所であります。

そこで真言宗の方でもその點を捉へて言ふので、心に思ふ事が佛様と一致するやうに、口に言ふ事も佛様と一致するやうに、身に行ふ事も佛様と一致するやうにしたいところが心を善くする爲には、口に言ひ、身に行ふ事からやつて行かうといふのです。そこで口に言ふにはどういふ事をするかといへば、真言を唱へるより外ない。それから身に行ふのは印契といつて、手にいろいろの形をつくる。これが真言宗の方の修行の仕方です。口には真言を唱へる。真言といふのは、チョウド吾々が南無妙法蓮華經と唱へると大體の意味は同じであります。大日經の中に説かれて居る教を短い言葉に纏めて、

これを一心をこめて口に唱へる。光明・真言と言ひます。光明は「光り輝く」といふ意味で、その真言を唱へることに依つて、佛の光が自分の心にサツト射して來るといふやうな意味から光明・真言と言ひます。要するに佛の徳をお讀め申し、又自分達は佛と一致するやうなことを念願として、その心持を言葉に現はすのであります。

それから印契といふのは手に或る意味を現はす。真言の方で言ふと十本の指がそれを智慧とか慈悲とか、方便とか、戒を守るとか、いろ／＼の意味を現はして居るので、この指をヌツカタ握めて握ることに依つて、智慧を磨かうとか、慈悲を行はうとか、世の中を救はうとか、人の爲に力を盡さうとかといふ心持を現はす、それが印を結ぶといふことであります。日本では芝居などで、例へば仁木禪正が出て来て、いろ／＼怪しい事をする爲に指を握つてこんなことをやるのを、印を結ぶと言つて居ります

が、要するに印といふのは心持を形に現はすものであります。ですから佛様のお像を見ますと、皆指の組み方が違つて居ります。佛様は無論大慈悲を以て一切の人をお救ひになるのですけれども、自分は特に斯ういふ所に力を入れようといふ、その佛様の特になつて居ります。それに倣つて吾々も印を結んで約束をする、印契の「契」といふ字は約束をするといふ意味で、この形に依つて佛様と約束をして、佛様護り下さい、斯う約束をするのが印契です。

斯様に口に真言を唱へ、手に印を結ぶことに依つて、佛のお力と自分の心持と通ひ合ふやうな道を開かうといふのが真言宗のやり方で、これが法華經には無いといふのです。いろいろの理窟は法華經も大日經も似だやうなものだけれども、大日經に於ては斯ういふ實行方法が教へられて居るから、その點に

於て自分の方の宗旨が勝つて居る、斯う言ふのであります。これは一通り道理があるのであります。大日經といふ經典は法華經よりは劣つて居るものでありますから、その議論には根柢がないけれども、しかし今申したやうな、たゞ理窟を考へるだけでなしに、口に言ふ事も、身に行ふ事も一致しなければいけないといふ、この説は真言宗の教が正しいのであります。吾々が法華經を信ずるのでその通りで、たゞ法華經の理窟を一通り辨へたのではいけない、口に言ふ事と身に行ふ事とが佛と一致しなければならない。ですから吾々は佛様に對して掌を合せて拜なければならず、口に經典を読み、題目を唱へるといふことをやらなければならんので、南無妙法蓮華經と言つても、一度言つたら解つて居るといふやうな考ではいけない。口に言ふ事と、身に行ふ事と、心に思ふ事と、始終これがお互に促し合つて進め合つて行きます。心がシツカリすれば自ら口にも現は

れるし、行ひにも行はれるといふこともありますけれども、又口に始終善い事を言つて居れば自ら心も善くなり、行ひも善くなると言へるし、又行ひを善くして行けば自然口にも善く言ふやうになり、心に思ふ事も善くなる譯です。この三つの事は互に掛け合ふのですから、その一つだけやつたら澤山だといふ譯には行かない、又一つに偏つてしまつてもいけない、何でも題目を唱へて居ればそれでいいといふものではない、心が伴はなければならず、身の行ひが伴はなければならん。何時でも心に思ふ事と、身に行ふ事と、口に唱へる事がお互に抜け合つて、原因となり結果となつて信心を進めて参るのであります。さういふ點に於て真言の方で謂ふ今議論は一通り尤な事でありまして、吾々も納得が出来るのであります。たゞその根本の經典が法華經に比べて及ばないものである。又大日如來といふものの解釋の仕方が、法華經壽量品の本佛よりは遙かに浅いものであります。

經を主にする所であるのに、その叡山から出た慈覺大師までが、真言の方が勝れて居ると言ふから、これは真言が勝れて居るに違ひないと思つて、法華經といふ經典と、大日經といふ經典とのその内容をよく調べることなしに、一概にさういふ風に世の中の流行を趁つて行くといふことは、言ふに甲斐なき事である。洵に情ない事である。斯う言はれるのであります。

して戴きまして一通り讀んで参らうと思ひます。

且つ密嚴經といふ經の中には、十地經、華嚴經といふやうな經もあり、大樹經、神通經、勝鬘經といふやうな經もある。又その他の經もあるけれどもそれは皆この密嚴經といふ經の中から出て居るのだ。この密嚴經といふものが一切の經の中に於て、最も勝れて居るのだと言つてある。

密嚴の「密」といふのは深い意味のことです。「嚴」といふのは美しく行ふといふので、この意味はやはり大乗の經典で吾々の参考になるのであります。密嚴の經典で吾々の参考になるのでありますが、密嚴即ち深い信仰があつて、それが嚴、即ち美しい行ひ

のであるがら、吾々はこれに賛成しないのですけれども、今申したやうな點に於ては、宗教として相當大事な所を捉へて居るといふことは言へるのであります。この頃では教育といふものが知識を主にする教育になつてしまつたものですから、あまり斯ういふ口に言ふ事とか、身に行ふ事とかいふ問題を喧しく言はないで、何でも一通り理窟が解ればいいといふやうになつて居りますけれども、實際、それでは世の中といふものは善くなりはしないのであつて、やはり心と口と身と、この三つが伴つて行くといふことが非常に必要な事であります。さういふ譯で真言宗の方ではその點を捉へて、印を結び、真言を唱へるといふことがあるから、真言宗が法華經より勝れて居るといふのであります。

そこで慈覺大師、これは叡山から出た勝れた人であります。が、この人も真言が勝れて居るといふことを言はれた。けれども何しろ叡山といふものは法華

に現はれるといふことです。嚴は何時でも「嚴飾」といつて飾るといふ意味ですから、美しい行ひ、立派な行ひといふやうな意味です。人間が善い行ひをしようと思つたら、深い信仰を持たなければいけない、深い信仰が美しい行ひに現はれる。斯ういふ意味で密嚴と言ひます。その點のみは正しい教に相違ない。たゞその深い信仰といふのが何を信するかといふことになると、それが法華經ほど深く言つてない。しかし今申した點だけは正しいので、深い信仰があれば、それが美しい行ひに現はれるといふことは間違のないことあります。たゞ行ひだけを善くして居ても、信まで行かなければ十分のことは出来ませんから、その深い信仰を本にして美しい行ひにこれを現はして行くといふことを説きましたものが密嚴經であります。だから密嚴經の中に、これが根本である。いろ／＼な經典もあるけれども、それ等の教といふものは、皆この深き信仰が本になつて美

しき行ひに現はれるといふ、この意味から出て居るのだ。それ故にこの密嚴經の中に説いてある事をよく信じさへすれば、本當の信仰が出来るのであつて、この信仰は一切の教の中に最も勝れたものだ。斯ういふ事と言つてある。

大雲經に云々是經は則是諸經の轉輪聖王なり。何を以の故に、是經典の中にも衆生の實性、佛性、常住の法藏を宣説する故也等云云。

その次に大雲經といふのも、これも大乘の經典であります。その中に言つてあるのには、今この經の中で説く事が、これがいろ／＼な經典の中で説いて居る中の一番勝れたものである。王様にはいろ／＼な王様がある、その中に於て、轉輪聖王といふ最も勝れた徳のある王様が出ると、他の王様は皆こ

れに歸服してしまふといふことを、印度に昔から傳へられて居るが、チヨウド今こゝで説くのがそれである。今この經の中に説くことを以て總ての教が統一されるのである。それはどういふ譯かといふと、この經典の中には一切の人間の實性と佛性と常住の法藏とが説いてあるからである。

「實性」といふのは人間の本當の性質です。人間の本當の性質といふのは、迷を離れて眞實なるものを求めるといふことが、これが人間の本當の性質です。ですから實性といふのは眞を求める性質です。これは如何にもその通りであつて、吾々は嘘をついたり、出たらめを言つたりするけれども、しかし嘘をついて、出たらめを言つて氣持が好いものではないのであつて、人間として本當に考へて見れば、眞實の事が氣持が好いに相違ない。何でも本當の事を知りたい、それを知つて儲けるとか儲けないとかいふのではなくて、本當の事を知つたといふことが人

間に取つては愉快な事なのです。だから人間の眞實の性質からいへば、一切の虚偽を離れて眞實のものを求めて行きたいといふ、これが人間の實性です。それから又人間といふものは屢々申すやうに、一人で生きて居るものではない、お互の力が相集つて人生を營んで居るのでですから、その人生の眞の意義をシツカリと捉へること、それが所謂「佛性」です。佛性といふのは教ひ合ふといふこと、情をかけ合ふといふことを主にする。自分一人生きて居つてはつまらない、嬉しい事も一緒に喜んで貰へば餘計に嬉しいくなる、悲しい事も一緒に悲んで貰へば忍び易い、互に教ひ合つて行くといふことが、それが人間の本當の意味である。それは何も國家の爲めとか、社會の爲めとかいふ難かしい事を考へないで、人間として一人で考へてボソンと孤立して居るよりも、互に懇め合つて、互に扶け合つた方が好い氣持に相違ない、それが人間の本性である。情をかけ合ふといふ

ことが、それが佛性である。斯ういふ風に教へるの  
であります。それからその次に『常住の法藏』といふ  
のは、これは永久といふことです。吾々は一時的の  
とが直ぐ消えてしまふのは嫌ひで、後まで残した  
い、續けたいといふことが人間の本性です。その時そ  
の時で事情が變つて行つたのでは済につまらない、  
花が咲いても綺麗だなと思へば散るのが惜しい、ど  
うぞ何時迄も残ればよいナと思ふ。月が丸く光つて  
居れば駄けて行くのが惜しい、どうぞ何時迄も丸く  
ありたいと思ふ。永久を求めるといふことが人間の  
本性である。人間の壽命は限りがあるのだけれど  
も、人間といふものは永く續くことを求めるもので  
す。死ぬのが何故惜しいかといふことは、理窟と言  
へば判らない。ローマの或る哲學者が面白い事を言  
つて居ります。自分がおそらく腹の減つた時に、  
眼の前に非常に恰好の悪い、見たところのよくない

果物を持つて來られた、その果物が如何にも恰好が  
悪くて汚いので食ひたくなかつた、人が進めるけれ  
どもどうしても厭だつたが、無理に勧められて食つ  
て見ると非常に美味しかつたので、これなら早く食  
べればよかつたと思つた。それと同じやうなこと  
で、自分は死といふことに出合はないから非常に怖  
がつて居るけれども、死んで見たら案外好い事で、  
これなら早く死ねばよかつたと思ふかも知れないで  
はないか。斯ういふ事を言つて居りますが、成程ま  
がつて居るけれども、死んで見たら案外好い事で、  
死に出合つたら、こんなことなら早く死ねばよかつ  
たと思ふかも知れないといふ、それは又ア一應の理  
窟です。けれどもそんな理窟をいくら言つたところ  
で、やはり人間は生きて居たいのです。生きて居た  
いのは何故かといふと、何時迄も續けたいのです。

途中で消えるのが厭なのです。これが人間の本性で  
す。人間といふものは本當の事が欲しい、お互に扶  
け合ひたい、さうして一つの事が永く續いて居たい  
といふ、これが人間として本來有つて居る要求なの  
であつて、別に人から教へられる譯でもない、本来  
人間はさういふ要求を有つて居るのである。それだ  
から毎日の仕事でも今日のものが明日に續くから宜  
しいので、これが違つた日には厭になつてしまふ。  
私は自分の家を出る時に女房に『それでは行つて  
来るよ』と言つて出掛けた。歸つて来ればやはり同  
じ女房が居つて『お歸りなさい』と言ふ。同じ家の  
内で、同じ疊の上に坐つて話が出来ると思ふから、  
平氣でこんな處でお喋べりをして居る。これが若し  
歸つて見たら家が無くなつて居るかも知れない、家  
の女房が居ないで知らない女が居るかも知れないと  
思つたら、私は一分間でもこんな處に落着いて居ら  
れはしない。だから人間は變るといふことが厭なの

です、どうかして續けたいと思ふ。又續き得ると思  
ふから安心して居られる譯でありませう。これは人  
間の本性ですから失ふ譯に行かない。それが本にな  
つて修行といふものも出来れば、社會生活といふ  
ものも出来るのであります。たゞそれを深く説くか  
淺く説くかといふ、その説明の仕方に就てはいろ  
いろありますけれども、大體に於て大乘の佛教を説  
かれる時には斯ういふ事を説かれるのであります。  
それで今の大雲經の中にもさういふ事を言つて居  
る。衆生の實性と佛性と常住の法藏を説くのであ  
る。法藏といふのは澤山の教といふ意味で『藏』と  
いふのは澤山のものといふことです。常住を教へる  
ところの澤山の教がその中に説いてある。それだ  
からこの大雲經の中に説いて居ることが、多くの人の  
心の信仰の土臺を定めるものになるのだと言つてあ  
る。

六波羅蜜經に云、所謂過去無量の諸佛所說の正法及び我今說く所の所謂八萬四千の諸の妙法蘊なり。攝して五分と爲す。

一には素咀縕。二には毘達磨。三には阿毘達磨、四には般若波羅蜜、五には陀羅尼門となり。此五種の藏を以て有情を教化す。若彼有情、契經、調伏、對法、般若を受持すること能はず。或は復有情諸の惡業、四重、八重、五無間罪、方等經を誇する一闡提等の種々の重罪を造るに銷滅して速疾に解脱し、頓に涅槃を悟ることを得せしむ。而も彼が爲に諸の陀羅尼藏を説く。此五の法藏、譬ば乳、酪、生蘇、熟蘇及び妙なる醍醐の如し。總持門とは譬ば醍醐の如し。醍醐の味は乳、

それから六波羅蜜經といふお經の中にも亦同じやうなことが言つてある。過去の數限りない佛様のお説きになつた教といふもの、又今此處で釋迦牟尼佛がお説きになるところの教といふものは八萬四千の

これは澤山の數といふだけの意味であつて、これを纏めて分類して見ると五つになる。第一は素咀縕、第二は毘奈耶、第三は阿毘達磨、第四は般若波羅蜜、第五は陀羅尼門である。第一の素咀縕といふのは梵語で、支那の言葉に譯せば「經」といふ意味です。經といふのは前にも申しましたが「縕」とい

ふことで、細い綿糸か何かの縕のことです。印度では昔は女人の髪飾りに繕だの笄といふものはありません。花簪などもないのですから、髪飾りとして花を集めて、それを糸で縛つて、その糸の先を少し長くして置いて、髪の毛にしばりつけたもの

もありますけれども、それはこちつけです。何時でも經といふ字は縕といふ字で、今の花を縕でしばるやうに、佛様が折に觸れてお説きになつたものを纏めて後世に傳へるといふ意味であります。

その次に毘奈耶といふのは「戒」です。佛様の教は何れも尊いものである。その教を伺つただけでは直ちに實行が出来るものではない。何故なら人間には煩惱があつて、いろ／＼間違ひがありますから、その佛の善い教を實行する爲には己れを戒めて、そのことを説かれたものが即ち戒であります。これは非常に必要なことです。少し餘計な事を申すやうですが、その尊い教を纏めて、チヨウド縕で花をしばるやうに一纏めにして後に傳へるもの、これを經と名づく。ですから佛様がいろ／＼の説明がついて、經は「つね」といふ字で、つねに變らぬものだとよやうな説明

てもその善き教は入らない。譬へばコップの中に汚い水が一杯入つて居れば、上から綺麗な水をいくら注いでても入りはない、この汚い水をスッカリ出してしまへば綺麗な水が入る。それと同じやうに、我儘な心持で勝手な事をやつて居つてそれを改めなければ、いくら教を聽いても入るものではない。だからその汚い水を出すといふこと、それが戒です。戒なしに教といふものは決して力を有たない。これは必要な事です。ですから經典を讀むと何時でも戒を持つとか、戒を破るといふことに依つて人間の價值を決めて居られるのは、如何にも尤もでありまして自分の過を慎しむことなしに善い事を考へて見たところが、それは力にならない。今の時代は、兎角新しい事を教へることはいくらでもやるけれども、この間違を直す方の方法が甚だ足りない。こそは非常な缺點だと思ひます。學校教育などでもいろ／＼説明をして、例へば忠君愛國を説いて呉れる、正直に

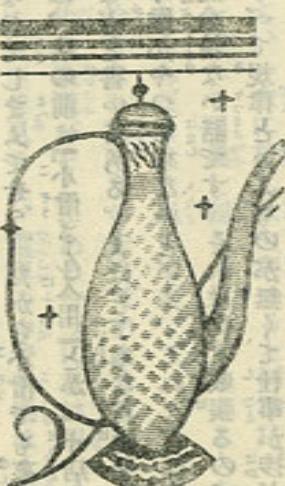
することを教へて呉れるけれども、それなら自分の間違をどうして直すかといふその方は構はないで置いて、勝手な事ばかりやつて、忠義だ、愛國だ、孝行だ、正直だといつても、それは實際に於て及ぶものではない。これは教育の方法として大事な事でありまして、一方に於て教を與へると同時に、一方に於て戒を與へて間違を制して行くといふことをしなければならんだらうと思ひます。少し餘計なお話になるやうでありますけれども、今の時代の缺點がそこにあるやうに私は思ひます。ドイツに行つて見ると、電車の中で子供は大人に席を譲るに決つて居る。小さい子供が腰を掛け居る、吾々が入つて行くと子供は立つて席を譲ります。これはモウ決つて居る。私共のやうな外國人が行つても、これはチヤンと譲つて呉れる、外國人だからといつて馬鹿にして、席を譲らんといふやうなことはない。何故さういふことをやるかといふと、子供

は大人のお蔭で生活して居る、大人のお蔭で教育を受けて居るのだから、大人の恩といふものを思はなければならない。たとひ自分の親でなくとも、大人のお蔭だから、自分に恩がある大人が來た時には、子供は席を譲るのが當り前だ、斯ういふ事を車掌が説明して呉れました。これは私は非常に善い事と思ひます、決して子供に對して残酷でも何でもない、そせる事なしに、たゞ知識を與へて、たゞ物を教へても、それは人間として善くなりはしない。さういふ所は我國に於ては非常に缺けて居ります。それはどうも宜くないと思ふ。商店などへ行つて見てもさう思ひますが、ドイツでもイギリスでも番頭さんが小僧に對して、何々君だの、何々さんなどと言つて居る所は一つもありはしない、必ず呼づけです。番頭さんは小僧に對して「ジョン」とか、「ジョウージ」

とか呼づけにする。これは發り前です。何も番頭が威張るのではない。上に立つて命令する人は、下にあつて教を受ける者に對して、或る威嚴を以つて臨むといふことをしなければ仕事は捗どりはしない。だから番頭さんは小僧を呼づけにして居る。ところが日本ではウツカリこんなことをやつたら小僧が居なくなつてしまふでせう。だから小僧でも募集する時には、店の前に「小僧さん入用」とか「小店員君募集」などと書いてある。よほど丁寧な言葉を使はないと小僧がやつて来ないといふ、これなどは實をいへば隨分情ない話です。それは何も威張るのではない。すべて規律といふものが無くて仕事が捗どりのではないから、これは非常な大事な事であります。學校で先生が生徒を呼ぶのでも皆呼びつけです。誰々君とか、誰々さんなどと呼びはしない。教室で先生が名前を呼ぶ時に、一々何々さんだの、何々君といふ學校は外國にはありやしない。これは當

り前です。ものを教へるのですから、教へる人が習ふ人に對して、敬語を用ひる必要はない。それは教へる人が何も威張るには及ばない、自分の力の足りないことは反省するが宜しいけれども、そこには規律といふものがなければならないのですから教へる人が生徒を呼びつけにするのは當ち前です。それでなければ本當の教育は出来るものではない。さういふ事は我國が一番弛んで居ると思ひます。新様な點はお互に氣をつけまして、何も上に立つ人が威張るには及ばんけれども、世の中の規律といふものを立てゝ、人々が反省して己れを磨くといふことを勵行して行かなければ、善い教といふものが行はれないと思ふのであります。

そこで佛教に於ては戒を重んずる、戒を破つた者は到底物の役に立たんといふことを言はれるのは、實に尤もな事であります。その點に於て吾々は大人と思ふのであります。



## 肇國神話

(一)

古稱出來る所れ當分日本文書全集  
第一卷第十一章

海軍少將 岩野直英

御依頼に依りまして、『肇國神話』といふ表題に依つてお話することになりました。教育勅語の中に『國ヲ肇ムルコト宏遠ニ徳ヲ樹ツルコト深厚ナリ』と仰せられてあります。徳を樹てるといふことは、神代の時ばかりではなく、代々の天皇が順次お積みになつた徳のことです。國を肇むること宏遠といふことがはつきりしないといけないから、肇國のお談が必要になつて來るのであります。それが解らずに教育勅語を讀んだら、根の無い理解に成つてしまふことになる譯です。

我國の肇國神話は、法華經を學んで居る皆様方にはよく解る筈であります。法華經はその構想、その考へ方が實に廣大で、而も巧妙であります。如來壽量品にもある通り、佛は久遠實成、宏遠なる昔から永い間衆生を教化して已まない。さうして生れ變り死に變りして現代に至つても、常に如何にして衆生をして佛身を成就せしめんかといふことに専ら努力して居られます。國は佛國土にし、個人々々は皆佛に成るまでやつて／＼やり抜くから、信徒等も油斷をせずに寛までもやれ。途中で成功したやうな心持になつて居るのは、それは増上慢といふものである。寛まで、限り無い修行をしなければいかぬのだといふことを教へられる。他のお經では、斯うすれば成佛だといふやうなことを言ふけれども、法華經はさうではない。本佛を奉じて永久に修行することを覺悟させる懇ろなる教に外ならないのであります。それで我國では教といふものは明治天皇の教育勅語に於て成立ちましたが、肇國の初に於て、極く簡單で

あるけれども、其の数の淵源があり、理想がありまして世々その美をなす事をよく考へて見ると、どうも法華經に彷彿たるものがあるのであります。

この神話は日本書紀と古事記に據るのであります。日本書紀は断簡の寄集めだから、脈絡が通らず統一が取れない。是は参考にはするが、主として古事記で御談し致します。其の積りでゆつくりお聞き下さい。その中には皇室の記錄、國記といつて國の記錄、それから公民といつて國民の事もお書きになつてあつた。聖德太子ほどの方が指圖してお書きになつたのであるから、必ずや立派なものであつたらうと思ひます。ところがその歴史が、蘇我入鹿滅亡の際に惜しい事に焼けてしまつたのであります。併し焼残りも少しはあつた。それを船史恵尺といふ人が拾つて中大兄皇子に献上した。だから第四十代天武天皇の御代に、國史をチヤンと記錄して置かなければならぬといふ詔が出て古事記を書くことになつたのですが、その時に勿論焼残つたものが参考にもなつたので有らう。出来上つたのは第四十三代元明天皇の時で、聖德太子の歴史をはじめて書かれた頃から、この古事記が出来上るまでの間百年ばかり経過したのであります。

この古事記は太安萬侶おほわすまろが書いたのであります。その助けとなつたのが主に稗田阿禮稗田アリといふ青年であります。この人は非常に記憶力がよかつた人であります。昔は文を以て歴史を傳へたのではなく、人から人に言ひ傳へて來た。つまり日本人として覚えて居なくてはならぬ事はどうしても言ひ傳へられるもので、稗田阿禮もさういふ言ひ傳へを非常によく記憶して居たのであるから、これは作りごとではない。日本人の思想が具體化してだん／＼傳説が出來たのであるから、重んじなければなりません。それを太安萬侶が古事記にしたのです。勿論前から各家々にはいろいろ書類があつたでせう。さういふ書類も取入れて、本當のところを正して、古語を出来るだけ當代日本文に書き直し

てさうして古事記といふものが出来上つたのであります。

それで私はこの古事記を読んで、少しも無理な解釋をしてはならぬ。古事記その儘を考へなくてはならぬと思つたのであります。例へば第一に日本は世界一だ、外國は野蠻國だ、何も外國に頭を下げる事はない、教だつて外國に徹ふことはないといふやうに、はじめからさういふ頭を以て解釋したのでは、とても頑迷固陋にして而かも牽強附會な説が出来る。先輩には此種の研究も少くない。それは私のやうに清明な心持を以て、書いてある通りに讀まうしないからさうなる。私は何もなしで読んで、その結果はやはり國體の事は斯うであるといふことが安心して解つた譯である。

私の言ふ事は拙いのですが、自分では私の解釋して行くことが、一番正確な觀方だ、斯う思つて居るのであります。日本の神代の話といふものは、歴史として考古學者が幾ら調べても、神代の話と同じ事跡は解らない、それは日本人の思想であつて、日本人は斯う思つて居つた、斯ういふ事を信じて居つたといふことだけが事實であつて、歴史的に本當にさういふ事があつたのかどうかといふことは、それは判らない。佛教でもさうだし、キリスト教でもさうです。神様の事になつて來るとみな信じてゐることが事實であつて、それを歴史で證明しろと言つても非常に困ることもあります。さういふ事に就ては、この統一團のお方は慣れて居るのですが、今の科學知識から見てそんな事がある譯はない、故に自分は信じないと言つたら、それでは求道心なきあきれ果てた人と言はねばならない。神話を全部信ぜんでも善い。若し神武建國が神代の投影である事に氣付いたら、古典は上手に讀めたと言つて善い。藝術的には神代はバノラマの壁畫部である。人皇の代から見て景色のそぐはない點は取るに足らない。

古い本でありますが、古いと言つても紀元一千三百七十三年頃だから、日本の皇紀から申しても半ばより後に出來たものであります。事柄は宏遠な古い事を書いてあるけれども、それを書いた書物といふものは、何も古典だからとい

つてさう古いものではない。それで割合に整つて居るのです。

是から本題に入ります。先づ古事記は一番はじめ造化といふことを考へて居る、宇宙萬有は無始のはじめから存在して居つて、増減するものではない、併しながらその形の變つて行くことは考へて居る。天地がまだはじまらない時即ち『天地初發の時、高天原に成りませる神を、天之御中主神と名く』と先づ書いてある。天地の始する前から神があつた。それを天之御中主神と名けた。同時に高御產巢日神、神產巢日神もあつた。然しこの三柱の神は、みな獨神としてお出來になつたところの神であつて、而も隠身である。隠れ身であられた。つまり肉體を現はさないお方であった。斯う書いてあるが、これは餘り説明しなくとも解るのでありますか、こゝは非常に大事でありますから一言します。どういふ譯で身を現はさないか。それはまだ天地が出來て居ないからである。佛教でいふと、所謂教化すべき衆生もなく從つて教も何も無い。だから身を現はさない隠身の神であつた。隠身といふのは、一度生れたけれどもお隠れになつたといふ意味ではないのであります。

この三柱の神様の名前に就て考へて見ることは、亦非常に大事であります。高天原といふのは、普通天と言ひますけれども、宇宙全體を意味するのであります。その宇宙全體の天の眞中に、天之御中主神といつて、その宇宙の主になる神があられた。それから高御產巢日神、このお名前を文字に依つて想像するのですが、高御產巢日神といふのは高い所、即ち高天原の方面を受持つて、むすびの働き、所謂生成化育をするところの神靈である。それから神產巢日神といふ神様ですが、上の『神』の字は他でいふ尊い神様といふ意味ではない、神といふのは佛教でいふ一切衆生といふことで、地上の生物のことを神といふことがある。だから地上を受持つて、いろいろむすびするところの神様らしいのです。そこで天之御中主の神様はさういふむすびの働きはしないでも主神だから宜い、けれどもあと二人の神様は、まだ出來て居ない天地及一切衆生を造り上げるといふ方の、むすびの働きをする神様のやうである。

天之御中主の神はその優チツトしておいでになるが、產巢日の神様の方がこれから活動をはじめる。それで『國稚く、浮脂の如くして、久羅下なすたゞよへる時に』と書いてある。久羅下なすといふのは、あのフワ／＼海上に浮んで居る海月ではない、薄暗氣といふ意味です、浮脂のやうにまだ天地が固まつて居ないのである。時に、『葦牙の如、萌蘖る物に因りて成れる神』これは天地の中の地の方が出來て行く様子を叙して其所に神が出来るといつたのです。葦の芽の伸びるのを見て居ると、そこからバツト出來て來た神様がある、それは宇麻志阿斯詞備比古遜神、次に天之常立神、この二柱の神はやはり夫婦神ではなく獨神としてお出來になつて、而も隠身であつた。つまり斯ういふ時は誰が親といふことが判らずすにお生れになつて居るので、それは神代の事だからそれで宜いのです。この二柱の神のお出來になつたのもやはりむすびの働きに依つてだん／＼進化をたどるのであります。その次に出來たのは國之常立神、豊雲野神、この二柱の神もやはり各々獨神で、隠身であります。次にまた出來た神は宇比地遜神、妹須比智瀬神、この『妹』といふのは夫婦の女神様の方です。それから角松神、妹活松神、次に意富斗能地神、妹大斗乃翁神、次に淤母陀琉神、妹阿夜詞志古泥神、斯ういふ神様がお出來になつた。その次にお出來になつたのが伊邪那岐神妹伊邪那美神といふ二柱の神である。法華經などによくあることで、昔々日月燈明佛といふ佛があつて、それから二百萬億の佛がだん／＼出て來たとか、或は不輕菩薩が居つて、非常な活動をして、さうしてまた四百萬億の佛の爲め修行して遂にお釋迦様に成つたとかいふやうなことがあるので、その佛は一體誰から生れたかとか、その佛のお母さんは誰かといふやうなことは問ふ必要はない。やはりそれと同じことで、高御產巢日神と神產巢日神が一番はじめに居つて、獨身で而も隠身であつたが、だん／＼夫婦の神様が出來た。それから伊邪那岐神、伊邪那美神になると、モウ人間の形をして居られるので、古事記に書いてあるのに、ビヨコンと凹んだ所があるので、それを埋めて見たところが、これで一つ國が生れて來たといふやうにむすびの作用が具體的になつて來た。これから一切衆生は一人では出

來るものではない、親が子を産むのであるといふ觀念がだん／＼出來て來た譯であります。それで岐美二神は諸國には「結神」として知られて居りますが、これは隱身であられた高御產糸日神がこゝに現身となつて現はれて來たものと飲込んで宜いのである。これから國產み神產みの働きをなさるのである。

これから伊邪那岐神、伊邪那美神のお話となりますが、天神 諸の命以て伊邪那岐命、伊邪那美命 二柱神に詔り

たまひて、この漂へる國を修理固成せよと、天沼矛を賜ひて事依したまふ」とあります。天神高御產糸日神をはじめとし、その系統の神様の意見を受權いて、伊邪那岐命、伊邪那美命は、所謂今の言葉で言へば、全権委員のやうな御資格を以て、さうしてこの葦牙が原の如く漂へる所を修理固成して、其處を物にしようといふことの活動が始まるのであります。

そこでこの二柱の神は『天浮橋』、天に浮んで居るところの橋にお立ちになつて、其處から下を見ると、葦原があつて、そこはまだ薄暗い所だ、そこを天沼矛を以て搜つて見ると湖がある。それを混ぜ返すと鹽、これをろろに書き鳴して』といふのだから、ガバ／＼鳴つた。天からさうしたのですが、さうすると垂落る湖、その矛先から鹽がボトンボトンと落ちて、自ら証能基島といふ島が出來た。それでこの二柱の神はその島に天降りになつて、さうして其處を根據として天之御柱をお建てになり、八尋殿といふ廣い御殿をお建てになり、其處で活動されるのであります。

その活動中に國土生みをなされた。どういふ國が生れたかといふと、大八島が生れた。それから又淡路島とか隱岐島といふやうな六つの小さな島も生れた。伊邪那岐命伊邪那美命に依つてむすびの働きが行はれたのである。

それからその神様は神生みといふものをはじめた、八洲六島、其處には山川草木も揃つて居るけれども、それを各受持つ者が必要だといふので、神生みをなされた。『神』といふのは今で言ふと吾々人間のことであります。昔の吾吾の祖先を神と言つたのですが、今の吾々のやうに下劣になつては居ない、真正直な者でありますから、今から見れ

ば吾々の祖先は皆神様である。その神をお生みになるのであるが、それは特殊な事情と種々な場所でお生みになつた新ういふ場合に斯ういふ神様が生れたといふので、その神様の名前が古事記では八十八數へてあります。例へば海の神、雲の神、山の神、川の神、水戸の神、雲霧の神、雷の神、風の神、木の神、火の神、食の神、衣の神、住宅の神、糞の神、禍の神といふやうな不純な者も混つて居つた。神と言ひますけれども、やはり善い神に悪い神も生れたのである。又古事記には、蒼人草一日に必ず千人死ぬも、一日必ず千五百人生れるなどといふやうにいはれてあるから、必ずやいろ／＼な一切衆生が生れたのである。それで世の中はだん／＼人が多くなつて來て、餘程複雜になつて來た譯である。だから惡いも生じて來たので、それを治める必要が愈々迫つて來た譯である。それで伊邪那岐命は、どうも世の中が穢れだし、自分の身も穢れたといふやうなことを仰しやつて居る。そして伊邪那岐尊は御身自らの禊祓を行なされるのであります。竺紫の日向橋小門之阿波岐原といふ、また演邊でせうが、さういふ所で禊祓ひをなさつた。

日向の阿波岐原とか言ひますけれども、當時肇國以前ですから、其處が日本であるか何がまだ判らない。その時に桔抜いだり、上着を抜いだりした場合にお生れになつた神が澤山あります。最後に左の御目を洗ひたまひし時に出て

来た神は『月讀命』、次に御鼻を洗ひたまひし時に出来ました神は『建速須佐之男命』とあります。今こそ天之御中主神が御出現になつたのは、これは必要であります。

それで天照大神のお生れになつたのを、伊邪那岐命は非常にお喜びになつて、自分は非常にお多く子を生んだけれども、『生の終に三貴子得たり』尊い子を得たといふので、その天照大御神に『御頭珠の玉の緒もゆらに取りゆらかして』、頭にかけてある珠の飾を取つて、ガチナ／＼させて、さうして天照大御神にかけて上げて仰しやるのには、あ

なたは高天原の主人にお成りなさいと言はれた。伊邪那岐命は、是にて世の中を造るといふ修理固成の任務を終了されたのである。

前に身を隠して久遠の昔からずっとして居たお方に、天之御中主神といふ神がおいでになつたが、こゝに生れたのは、天之御中主神が身を現はす必要があつて、天照大御神といふ御名前でお生れになつた。それだから『汝が命は高天原を知せ』と躊躇なく仰せられたのであります。高天原を知す神は天之御中主神といふことに定つて居るのに、これに来て伊邪那岐命が、天照大御神に高天原を治せと言ふのは不都合を仰しやるのではなく、今こそ天之御中主神は隠身ではなく天照大御神と號する現身だといふことを、こゝでハツキリ認められたからであります。

これからが天照大御神をめぐる大事な所で、教訓もこゝに併つて来る譯であります。天照大御神は伊邪那岐命に授かつた御頭珠を、御倉板舉之神といふ名前で大事にしてお祀りになつた。こゝにはじめて日本に道といふものが現れた譯で、親の遣し置かれた記念品を神様にして拜んだといふのが日本の國の道のはじまりである。これはよく覚えて置かなければならぬ。本居宣長の言を信れば『そも此道はいかなる道ぞと尋ねるに、天地のおづからなる道にもあらず人の作れる道にもあらず、此道はしも、畏きや、高御産糸日神の御靈によつて神祖伊邪那岐命伊邪那美命のはじめたまひて天照大御神のうけ給ひ、たもち給ひ、傳へ給ふ道なり、故、ここを以て神道とは申すぞかし』であります。さて先きに伊邪那岐命が月讀命に詔りたまひて、『汝が命は夜之食國を知せ』と言はれた。食國といふのは、御しろしめすところの國といふやうな意味で、天照大御神の御知らしめす高天原の夜の部分をお前は受持てといふことを仰しやつた。これは一種の誓證で、宛も日月といふやうな尊い徳が、天照大神と月讀命にあつたものとするのであります。それから今度は建速須佐之男命に詔りたまひて、『汝が命は海原を知せ』、あなたは海の親方になれといふことを仰せつけになつた。

これで三人の役割が定まつた譯です。その中で天照大神は宇宙の主である。西洋人が考へるゴット、或は佛教で教へる本佛、それはみな同じものであると思ひます。天照大御神は斯うで、久遠實成の本佛は斯うでといふやうに、それは説明の巧拙であつて、代々作りなし、書きならして翻譯して行つた經典に併ひ哲學的に非常に發達した佛教などとは、日本のやうな簡單なものは比べ物にはならぬであります。兎に角宇宙の主であるいふことに於ては同じである。宇宙の主が二人ある譯はないからこれは皆同じものだと思はなければならぬ。お前の所の主は佛だけれども、我家の主は天照大御神だと言つたら一つ所に主が二つある譯です。天に二日無しだから、天照大御神といふお方は天之御中の主である。それを外國人はゴットと稱へることもあるだらうし、國に依つていろいろな稱へ方があるでせうが、宇宙の主であるといふことは疑ひない。

そこで月讀命は、大人しく其の役目を今でも守つて居る譯であるが、併し建速須佐之男命は海原を知せと事依さにたまうたといふ事が解らないのです。

話は少し前に立戻りますが、天照大御神を宇宙の主とお定めになつたことを立極と言ひます、『極ヲ立テ統ヲ垂レ』と明治天皇の勅語にもあります。それで立極が定つたのですが、立極が定ると親であらうが、先代のお方であらうが誰であらうが、立極して高天原の主と定つた以上はみな、その人の臣下になる。その方が偉いか偉くないか、働きがあるかないかといふことは別である。位は天照大御神が一番上だ。それをみながたゞ承知して、そこに君臣の分といふものが已に高天原時代に確乎不動のものになつたのである。日本で臣が上に忠義をするといふこと、或は萬民が輔翼し奉るといふことは、どういふ譯であるかといふことを説明するのに、どうも説明の方法はないのです。他の方の教であると、君の恩が重き故に君に忠義をしなければならぬ、斯ういふことになるけれど最初はそんな理由は存して居ない。親の恩が重き故に親孝行しなければならぬ、さう言ふのも方便の教である。恩の有無などで孝が始つた

り終つたりするものではない。忠は立極の時に定つたことである。何故といふ道理はない。たゞはじめから天之御中主神が主と定つて居る。その他の者が從として仕事るのは當然と云ふ信念だ。それで世の中を主が治めたまふのに對して、それを總掛りでお助けするといふこと、これは隨神に定つて居るので、何も勢力の強いものに服した譯でもなければ、何か有難い事をして貰いたから、その恩に感じて服したといふ譯でもない。忠は理由なく成立して居るものであるから、どんな事も忠を否定するやうな理由に成らない。忠義をしなければならぬといふ理由がないのだから、せんでも宜いといふ理由は起つて來ない。そこに絶対のところがあるのであつて、非常に神聖なものである。日本人の忠は是の如き神ながら訓練されたものであつて、況んや恩あるをやと云ふ道徳も手傳つて強い忠が出來た。

・・・・・天照大神が宇宙の主である。天照大神が宇宙の主である。天照大神が宇宙の主である。天照大神が宇宙の主である。

於是、其の招福し八尺の勾玉、鏡、及、草薙の剣、亦、常世思金神、手力男命、天門石別神を副へ賜ひて、詔り給ひつらくは「此の鏡は、御前よりお付けする。天門石別神は御前よりお付けする。手力男命は御前よりお付けする。」と、詔り給ひさ。

専ら、我が御魂として、吾が御前を拜くが如、齋き奉り給へ、次に思

金神は御前の事を取り持ちて爲政給へ」と、詔り給ひさ。

・・・・・天照大神が宇宙の主である。天照大神が宇宙の主である。天照大神が宇宙の主である。天照大神が宇宙の主である。

# 軍人と日蓮主義

陸軍工兵中佐

岩

淵

經

夫

## 一、序言

近年日蓮主義が非常に勃興して、軍人の間にも盛に讃仰されて居ることは洵に慶ばしい事であります。之は日蓮主義が

我が國體を最もよく開明し、之とびつたり合つて居ることに依ることと考へます。現下日本は國體の明徴を叫ばれ、且つ

は國體の理想を掲げて奉職に進軍して居るのでありますから、日蓮主義が高唱せらるべきは「今正是れ時なり」と思ふのであります。

『軍人と日蓮主義』といふ題を與へられたのであります。

『軍へ天皇親率ノ下ニ皇基ヲ恢弘シ國威を宣揚スルヲ本義トス』（軍隊内務書綱領）といふ立前から日蓮主義を考へて見たるものでありますから、當らぬことが多からうと思ひます。

## 一、入信の動機

先づ私の入信の動機から申上げます。

夫正五年私が少尉で砲工學校の學生の時、集會所の賣店に本多上人の著された『日蓮主義初步』といふ小冊子がありました。それを手にして讀んで見ると、神道、儒教、佛教の長所短所を述べて居られる中に神道の特色として國體の尊嚴を闡明すること極めて明快でありました。而して此の御國體を信仰するには宗教の信仰によらねばならぬと力説されて居ることは強く私の心を打ちました。當時私は國體に就て其程的確な觀念を有つて居りませぬでしたから、國體は成程斯ういふものかと喜んだ次第であります。吾々は國體を理解せずして、軍隊教育に當ることは出來ぬ、どうしても國體に關するしつかりした認識を有たなければならぬと考へ、だん

研究して居る内に、興味津々として起り、日蓮主義こそ國體擁護の教であると信じ、鎌仰するに至つた次第であります。

## 二、宗教信仰の必要

### 1、人格完成の爲め

話の順序として宗教信仰の必要といふことから申上げます。第一に人格完成上必要であります。そこで人格とは何ぞやといふ問題が起ります。學者は色々難かしい説明をして居ますが、本多上人の答解は極めて明快である。人格とは誠の心である、その誠の心の屬性として智仁勇の三達徳があるといふのである。即ち



誠は基本人格で、智仁勇は屬性人格であると説明されて居ります。これ程快な答解はないと思ひます。この事は桃太郎の話が最も能く訓へて居ります。即ち桃太郎といふ人格に、犬、猿、雉といふ智仁勇を代表するものが統制されて居ること



それが分ります。桃太郎の話は吾々に人格を完成する方法を教へたものと思ひますが、進んでは我が國體を説明したものであります。是を軍人勅諭に就て觀るに、勅諭の五箇條に、

- 一、軍人は忠節を盡すを本分とすべし
- 一、軍人は禮儀を正しくすべし
- 一、軍人は武勇を尙ぶべし
- 一、軍人は質素を旨とすべし
- 一、軍人は信義を重んずべし

と諭されてあります。之を兵に教へるのに五本の指を以てします。五本の指を以て居る事は、忠節の忠、禮儀の節、武勇の勇、信義の義、質素の素であります。

闇をし、人に親切に道を教へたりする時に使ふから禮儀である。拳骨をくらはす時には中指が出るから之が武勇である。

無名指は大きいのと小さいとの間にあつて嘘偽りがないから信義である。小指は小さく慎ましやかにして居るから質素である。五ヶ條を試問されて答解する時に、一々指を折つて算へて落さぬやうに、又順序を間違へぬやうに言はなければならぬ。順序を間違へたら落第だ。斯う言つて教へると能く覚えます。或る人は軍人には勅諭が信仰であるから他に信仰など必要がないといふ人がありますが、それは未だ考の至らぬものであります。即ち勅諭には『抑々此五箇條は我軍人の精神にして一の誠心は又五箇條の精神なり』とお示になつて居ります。掌から五本の指が出て居る様に誠心から五ヶ條が現はれて來るのであります。それ故に、誠心は軍人精神の神隨である。されば『心誠ならざれば如何なる嘉言も善行も皆うはべの裝飾にて何の用にかは立つべき心だに誠あれば何事も成るものぞかし』と仰せられ、又『此の道は天地の公道人倫の常經なり行ひ易く守り易し』と訓へられて居ります。

誠は天地人の三才を縦に貫く道であつて、孟子は、誠は天の道なり之を誠にするは人の道なりと教へて居ります。斯く誠心が一番大切で軍人精神の心體である。然らば吾々が本當に軍人精神を作り上げる爲には、誠の心を鎌へ上げなければならぬ、その誠の心を鎌へ上げるにはどうするか。明治天皇様

### の御製に

目に見えぬ神の心に通ふこそ  
人の心のまことなりけれ  
とあるやうに、目に見えない神様に自分が向つて行く時に、眞に誠の心といふものが現れて来る。又

目にみえぬ神にむかひてはぢざるは  
人の心のまことなりけり

目に見えない神様に向つて恥ぢないのが己れの誠の心だといふのでありますから、どうしても誠の心を捉へて之を磨いて行かうとするには、そこに宗教の信仰の必要なることは明瞭であります。吾々の人格を完成する上に於ても、將又軍人精神を鎌へ上げる上にも宗教信仰の必要なることは、疑ふ餘地のないことであります。

### 2、國體信解の必要上

次に宗教の信仰は我が國體を信解する上に必要である。吾吾が國體を考へる時に、上皇室の尊嚴を意識しなければならぬ。皇室は天照大神の御裔がすつと傳はつて来て、その御魂を承け繼がせられて居られる。隨て現人神で在らせられる。即ち神様である。神様といふ一念に有難い、尊いといふ觀念が起る、そこに初めて皇室の尊嚴といふものが現れて來るのであります、その有難い、尊いといふことは宗教の信仰意識

によるものである。「神が居るなら出て來い」といふやうな態度では、到底神様を仰げるものではないのです。日本體は斯くであると理解しても、之を信仰に持ち来らねば何等の力をなさぬ。故に我が國體を單に理解するばかりでなく、信解する上から宗教信仰の必要なことは頗る明瞭であつて、日本國民たる以上、宗教の信仰は必要であると断定しなければならぬ。斯ういふ事を本多上人が力強く言ふて居りました。

尙ほ「日蓮主義初步」の中に、神道の特色として一、建國の理想。二、皇室の尊嚴。三、皇室と國民との關係。四、國民性の優越。五、正義と天佑の確信といふことを述べて居られます。茲に本多上人の卓見が親はれます。夫れは先づ第一に建國の理想を擧げられたことであります普通多くは萬世一系皇統連続といふことに依つて國體を説明せられて居りますが、それよりも建國の理想を第一に擧げてこれあるが故に皇室の尊嚴があるのだと説かれて居ることであります。これは國體觀上の達見であります。肇國の理想即ち建國の大目的精神は、天照大神の御精神であつて、御皇統は天照大神の御血統を承けさせ居らるゝばかりでなく、其御精神即ち御魂を承け繼がせられ居らるゝであります。そこに皇室の尊嚴があるのである。世間一般は御血統を第一に擧げられますが。上人は御精神を重しとなし、肇國の理想即ち

建國の精神より来る皇室の尊嚴を信解せねばならぬと申され居ります。日蓮主義の國體觀の透徹してることを知るべきであります。天台大師は宇宙の大を人間に譬へて説明されました。國家も同様人間に譬へて考へるとよく分ります。人間の價値を判定するに何に標準かと言つたならば、結局精神が基準である。血統が良いの、學問があるの、金があるの腕力が強いのと言ふ様なことよりも、その人間の精神の如何に依つて決定されるのである。精神とは誠の心、即ち人格を指すので、人間の價値は人格の高下に依つて判定されるのである。國家も同様、其の國家の特徴精神の正不正、高下に依つて優劣が決せられる。日本國の生れながらにして持つ精神、即ち建國の精神そのものが公明正大であつて、世界に卓越して居るから、我が國體は世界に冠絶して居ると言ひ切り得るのである。

此の國の心即ち國體より、皇室の尊嚴が現はれ、克忠克孝の國性が生れ、億兆一心、世々厥の美を濟したる國相を現じて居るのである。

吾々が天佑神助を確信して居ることも、國體正義を履んで居るから與へられるのだと信ずるので、戰場で天佑と感ぜられる事が度々御座いますが、全く御稟成の然らしむる處であつて、之が戰捷に大なる力を與へるのであります。

### 3、道德實行上

次に宗教の信仰は道德實行上必要であります。自分が善い事をし、悪い事をしなければ何にも宗教の信仰など必要ないと言ふ人がありますが、信は力なりで、善事を行はうとするにも其の眞の力は信仰より來るもののが力強く、實行確實である。涅槃經に如何に立派な繪を描いても、その傑放つて置くと、繪具が剥げて、永持をしない、その繪を水で保存しようとすると、繪は終に剥げてしまふそれと同様に吾々が善事を行はうと思つて居ても信なきものは何時かは崩れる。神様や佛様と自分が一緒に居るといふ氣持の時に、善事が持続されると説いてある。信仰は冥土に行かうとするお爺さんお婆さんのみのものでなくて、若い人が活動せんとする力を得んとするものである。日蓮聖人の如き、東郷大將の如き、偉人の活動の力といふものは信仰より來つたものである。

### 三、我が國體と日蓮主義

そこで進んで我が國體と日蓮主義との關係に就て考察して見ますのに、日蓮主義が最もよく御國體を説明し其大義名分を主張して日本を正しく導いて來たことを知るのであります。もとより佛教そのものが國家的な教であるから、我が國

### 1、久遠實成と天壌無窮

教育勅語の冒頭に「我カ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ德ヲ樹ツルコト深厚ナリ」とあります。是は正しく日本の國體を宣示せられたものと拜するのであるまして、此の事は本多上人や田中督學先生の教育勅語を理解された書物の中にも同様に述べて居られます。この肇國宏遠、樹德深厚といふことは法華經壽量品の久遠實成の思想に依らなければ徹底した解釋が出来ないと思ひます。久遠實成の本佛釋尊は、未來永劫常にして滅せず、衆生を利益して行くものであるといふ壽量品の思想からすると、皇祖皇宗國を肇むること宏遠で其れ以來常に德を樹て來られた。是れから以後も德を以て國を治めて行くのだ、王たるの德を布いて行くのだといふことになる。是が日本の國是であつて、天壌と共に窺り無く續いて

王たるの徳を布いて行くといふことになります、是が肇國の理想であり、國の心であつて即ち國體であります。本多上人は、天壤無窮と云ふことは只永く續くといふことではない、所謂「悠久は物を成す」で、遂に世界全人類の平和を成就するといふ大理想を意味するものだと言ふて居ります。

神武天皇の詔の積慶、重慶も、肇國宏遠樹德深厚と同意義であつて共に肇國の理想をお示しになつたものであります。此は法華經壽量品の真理に依つてのみ理解し得るものであります。

## 2、主師親の三徳と大義名分

次に吾々は上御一人を主師親の三徳として拜するのであります。之れ亦法華經に依るものであつて、日蓮聖人が開目録の勢頭に「夫れ一切衆生の尊敬すべき者三つあり、所謂主師親これなり」と言はれ、世の中に最も尊るべきものは主と師と親の三徳であるといふことを内典外典に就て述べられ、終に本佛釋迦牟尼佛は吾々の主師親であることを高揚せられ、佛教上の大義名分を主張されたのであります。是は壽量品の今此三界の處から出發して壽量品の顯本に至つて本佛釋迦絕對權威を光顯せられたのであります。天皇は吾々の主であり、師であり、又親である、而して宏遠なる天祖との權がありを見て上御一人と申し上げ。明津神と仰ぐ處に絕對の權威が顯はれるのであります。之も法華經の教理に依らざれば信

解し得ないであります。

日蓮聖人は大義名分を正され、佛教上の大義名分、即ち本佛釋尊を忘れて、彌陀、大日、藥師等の述佛に附いて行く誤を斷破せられ、國家の大義名分を明かにし、京都にお在はす天皇をないがしろにして、鎌倉幕府を謳歌して居る世人の誤を正し、飛ぶ鳥を落す權勢の北條幕府に諫諭を行つて首の座にはられた、之れ皆法華經に依られた事である。日本國の大なる革新即ち大化の革新、建武中興、明治維新に於て世の曲れるを、正しき中心に引き返した力は皆法華經の力であります。隨て日本國と法華經とは切つても切れない關係があります。隨て日本國と法華經とは切つても切れない關係があります。隨て日本國と法華經とは切つても切れない關係があります。

## 四、肇國の理想と本門戒壇思想

### 1、世界統一の天業

更に肇國の理想と本門戒壇の思想とは符節を合したる如く一致すると思ふのであります。私が本多上人の日蓮主義初步によつて國體の一端を知り感激したことと前に述べましたがそれは日本の建國の理想は神武天皇東征の時の詔に、「天業を恢弘し、天下に光宅す、蓋し六合の中心か」と、宣せられて、天照大神の御事業を押し擠めて、天下に光り居るとい

ふ。斯の如き廣大なる理想は、基督教の博愛の思想などは到底及びも附がぬものであつて、單に博愛を唱へて之を世界中に擴めようといふやうなそんな淺薄なものではない。抵抗を日本に据へて、茲に立派な文化を築き上げ、世界に其の光を放つて行かうとする、恰も太陽の光を受けて萬物が生成化育するやうに、六合の中心即ち世界の中心である日本に本據を置いて眞の文明を榮き上げ、世界全人類の平和を將ち來たそうといふ聖謨は、實に偉大なものであることに感激したのでありました。立正安國論の趣旨もその通りで正法を打ち立てて國家を安んじ天下の泰平を禱るべきであるといつて居る。個人個人を如何に信仰に導いたからといつて、世界の平和は來るものではない。國家の持つ主義方針が誤つて居れば、結局暗黒に來り上けるのである。獨逸帝國はその例であつて、獨逸國民は選民といつて、神様に依つて選ばれた民であると信じて居つたのであるが、カイゼルの軍國主義の誤りから遂に覆滅を來たし、國民が塗炭の苦しみに陥つた。國民が如何に信仰に歸くとも、國家そのものが教説されない以上、世界の平和は來らぬ。從つて國民の安寧は得られぬ。それであるから立正安國論は先づ國家を祈つて佛法を立つべしと論ぜられた。

又「八紘一宇」といふ言葉は最近盛んに使はれる様になり愛國行進曲にも「往け八紘を宇となし」とあります、之は、神

武天皇の御即位の前年の大詔に「六合を兼ねて以て都を開き、八紘を掩ひて宇となさん」とあるのであります、此の八紘といふのは四方八隅を指すので世界中といふこと、六合とは東西南北上下をいふので、やはり世界中を言ふのであります。世界中を統べて、此處に太しき柱を立てゝ世界を掩ふ家を建て、世界中を家庭的な平和な状態にしやうといふ六合一都、八紘一宇の大理想は日蓮聖人の本門戒壇の思想と全く一致すると思ふのであります。本門戒壇といふのは、御承知の通り三大祕法鈔に「戒壇とは王法佛法に冥し、佛法王法に合して、王臣一同に本門の三祕密の法を持ちて、有徳王、覺徳比丘の其の乃往を末法濁惡の未來に移さん時、勅宣並びに御教書を申し下して、靈山淨土に似たらん最勝の地を尋ねて、戒壇を建立す可きものか。時を待つ可きのみ、事の戒法と申すは是なり。三國並びに一闕浮提の人懐悔滅罪の戒法のみならず大梵天王、奇釋等も來下して踏み給ふべき戒壇なり」と示された本門の大戒壇をいふのであります。此は全く世界を統一して眞の平和を來たさうといふ大なる抱負を示すものであります。之が日本國に與へられた天の使命であり、世界統一の天業と申すべきであります。

斯う考へて、世界の大勢を大觀すると漸次世界は統一とい

ふ目標に向ひ、進みつゝあることを認めるのであります。前の歐洲大戰の結果歐洲に於ける帝國といふ帝國は殆ど崩壊してしまつた。即ち露西亞帝國、獨逸帝國、奧匈帝國は瓦壊して僅に残つて居るのは英吉利と伊太利である。併し英伊の皇帝と言つてもそれは既に空位を擁して居るだけである。斯様に世界は既て共和國と成つた、さうして次に来るべきものは新しい形式に於て出來上つて来る、その第一の見本が滿洲帝國であります。之は日本天皇の指導の下に、王道布施を生むとするものである、今後支那にも新中央政府が出来るであります。それ等も何處までも日本の指導の下に、王道樂土建設を建國の本領たらしむるものとせねばならぬ。斯の如くして所謂皇道大亞細亞主義を以て亞細亞を復活し、世界の平和に貢獻して行かねばならぬ。而かも各國の主權は認むるも主權者は皆我が天皇の前に頭を低げて謹んで勅宣並に御教書を承ける様にさせねばならない、然らざれば常に鬭争が絶えないので、平和は來らぬ譯であります。

今日本が興亞の理想を旗標とし大陸に進出して興亞の聖戰に從事し支那事變の解決に邁進して居るが、何等領土的野心等を有するものではない。全く神の心を以て天業に勵んで居るので、是れが聖戰の聖戰たる所以である。

## 五、世界統一と日本文化の高揚

1、法華經に基く理想的統一的文化の建設  
2、神儒佛三教の鼎立  
3、支那から色々の事を教はつたが、今度は支那人を教へて行かねばならぬ、それには本多上人の叫ばれた様に眞に日本が奮起して速かに法華經の教理に基づき思想を統一して理想的文化の建設に邁進しなければならない。而して興亞の大業を完遂する爲めには、東洋文化の發揚に努むることが必要であつて、本多上人の常に主張せられた神・儒・佛三教の發揚に努むることが必要であります。

## 六、軍人精神と日蓮主義

- 1、日本精神
- 2、聖戰の意義と我等の願行

然らば日本が世界に誇る文化とは何んぞやといふことにな

つたら、精神文化であると答へるであらう、其精神文化とは何にかと問ふたら日本精神であると答へるであります。然らばその日本精神とは何にかと問はれて、之に明快な答解を與へる人が少いのであります。色々日本精神に關する書物も出て居りますが、抽象的な説明が多い。お前の日本精神を示して見ろと言はれた時に、空な事を言つてる様では其の人は實行の伴はぬことを表明して居るのである。只抽象的に觀念的に忠君愛國の觀念だと言つても、それは頭腦の中の觀念であつて、實行を伴はぬ。故に支那人にも歐米人にも解らぬ。私は實行を主とする見地から、日本精神は軍人勅諭の五箇條であるとお答へをする。此の五箇條は軍人精神であります。從て軍人精神を得て居らねばなりません、併し軍人精神といふと何んだか狭いやうに聞えるので、此を世界に示すべく日本精神と叫ぶに至つたものと思ひます。日本精神とは何だ、日本人の精神だ、その内容は何だ、軍人精神と同一だと答へれば宜しいのであります。軍人勅諭に「此五箇條は天地の公道人倫の常經なり」と仰せになつて居りますから中外に施して憐らざるものであります。而かも此の五箇條は我國に最も誇るべき日本の傳統的精神であります。軍人勅諭は實行

を主と致しますから、一軍人は忠節を盡すを本分とすべしといふお諭にも、死は鴻毛よりも軽しと覺悟せよと想んごろに訓へられてあります、一死以て君國に報する考へて總てをやつて行けば宜しいのであります。戰争ばかりではない。オリソビックに出掛する選手でも、自分は日本國を背負つて斃れるまでやるといふことが日本の強味であり世界に最も誇るべきものである。次は禮儀であるが、日本人の禮儀の正しいことも世界の定評であつてオリンピックに行つても日本人の禮儀正しきことは賞讃の的に成つて居る。日本の軍隊の軍紀が最も嚴正であることも各國から敬服せられて居る處である。次は武勇であります。これは申すまでもなく古來よりの傳統の誇りである。それから信義に於ては、日本人は馬鹿正直だ、外交が拙いと言はれても、信義を守つて行く所に日本の本領があると思ふ。武士の一言金錢の如しといつて自分の教を信じて居るから嘘を言はぬ、そこが一番強味であります。其から最後の質素に就いても、日本の衣食住に於ても美術に於ても、質素な清楚な點に於て各國のものに優つて居る。戰でも質素なものが強いので質素をして居る者は戦に弱い。東北の兵が強いといふのは、平生不味い物を食つて尚ほ且つ困苦缺乏に耐へて居るからであります。

そこで私は端的に世界に誇示すべき眞の文化といふものは、決して華美なるものや空な理論ではない。實行を専ぶ日本精神である。それも具體的に現はす爲に勅諭の五箇條を擧揚しない。これは自分が軍人であるから、軍人精神に引付けたやうにお考へになるかも知れませぬが、さうではない。若しオランピックでもあるならば、その機會に日本精神をちゃんとこの五箇條に纏めて、それを如實に彼等に見せてやりたいものだと思つて居ります。而して軍人は國威宣揚の本領に基き、國家の理想實現に一身を捧げて居ること、日蓮主義者が一天四海皆歸妙法、本門戒壇建立の大誓願に精進することとは、其目的を同じうするものであります。斯く考へると軍人精神と日蓮主義とは、其揆を一にするものであります。

## 七、吾等の生活原理

### 1、赤子の自覺、頭首股肱の關係、 皇運扶翼の一途

2、佛子の自覺に立ち佛の所遣として佛の事を行するのみ。然らば吾々が日常生活に於てどんな事が準備となつて行かねばならぬかといふと、赤子の自覺に立つて一切の行動を律することだと思ふ。軍人勵諭に於て最も有難く感ずること

は、朕は汝等軍人の大元帥なるぞ。されば朕は汝等を股肱と稱み汝等は朕を頭首と仰きてそ其親は特に深かるべき」と仰せられて居ることであります。吾々下賤の者を擁護と頼まれることは、誠に恐懼に堪えぬ處であります。又恭けなき限りであります。吾々は畏れ多いことながら、陛下の赤子であるといふ自覺に立ち皇運を扶翼し奉るといふことは、吾々の信仰から申すならば、所謂佛子の自覺に立つて、如來の所遣として如來の事を行するものである。佛様のお使として佛様のお仕事をするのだ、斯ういふ者が吾々の日常の信仰生活の規範ではなからうかと思ひます。

## 八、戰場に於ける體驗

大變鹿死らしい事をお話を致しましたが、それならばお前がさういふ信仰生活に入つて、今度の事變で大陸に戦に行つてそれがどんな效果を現はしたか、斯ういふことがこの題を興へられた御趣意ではなかつたかと思ふのであります。私はこの度の事變に出征致しまして、甚だ平凡に過ぎて参りました。勿論死生の巷に立つた事も一再ならずあります。それも普通の事をやつて來た迄で、何も變つた事はありません。只終始心掛けて居たことは龍い死方をしたくないと思つて居たことです。殊に部下を持つものは誰しもそうでせう。其して任務を與へられるれば、勇氣がつくものであります。

1、七生報國、不滅の信念の強味  
是は誰しもであります。死んだら自分が無くなると思つたら命が惜しくなるであります。併し死んでも生れ變る、いふことを念願し之を信じ様とするものであります。  
單に靖國神社に神様に祀られるといふ丈けでなしに、來世に對する希望を抱く様になり七生報國といふことを一般に信じ様とする様であります。生命の不滅を信するものは實に勇敢に前線に出動する、之が案外戦傷しないのも不思議である。

最初上海戰線に於ては陣地戦で、狭い蟹壕の内に入つて激戦を重ねて居た時には、全く生きて歸れるとは思ひませぬでした。約二十日ばかりして、千米ばかり戰線の後方に退へました時にはホツとしました、ア、これは命があつたワ、お天道様は自分に未だ働きといふのだと思ひました。

上海戦が終つて徐州會戰に參加し、漢口攻略戦に入り大別山に掛りました。愈々此の河南、湖北の省境を越えれば漢口に進入る、漢口に入つたら今度の戦は終るのだ、大體こんな者を持つて居りました。それで一途に漢口へ、漢口へと急いであります。省境の峻険な山地に於て敵に喰ひ止められ、約一ヶ月惡戰苦闘を續けました。死傷者も多數出たので或一部にはモウ少しだ、無理をしてはいかぬ、無理をして今

### 2、天相手の生活——感謝生活

戰場に於ては困苦缺乏に耐へ克つ軍隊が、最後の勝利の榮冠を捷ち獲るのだといふことを體験致しました。そこで平生から之に耐ゆる修練を積むことが必要であります。又我々の心を天を相手に生活するといふ處に置かねばならぬと思ひます。上官に叱られたとか、人から不利なことを強ひられたとか思ふと、その人を怨む、さうするとだん／＼自分の心持がくしや／＼しますから、あの奴は怪しからぬ、何時か復讐してやらうといふやうな考になる。さうすると自分の心が始終落着きがないことになる。それを天を相手にして居れば心の平靜を保ち得ると思ひます。天を相手の生活は、感謝の生活に變るものである。感謝の生活といふものは、美味しい物を食はして貰つて感謝するといふ様な外から來る場合よりも自分

を能く豪観めて行く所に、本當の感謝の生活といふものが自然に起つて来ると思ひます。

### 3、無所得の心の強さ

モウ一つは、自分が何か得ようといふ心のある所に迷ひが起るのである。そこに色々韵味が出来るのであります。上御一人にお仕へ申す。一死君國に報するといふ考の外に何物もあつてはならない、といふのが私の信念であります。

取り止めのないことを申しましたが、之を要するに國體の本義に徹し、愈々信念を固くし、皇運を扶翼し奉り東亞新秩序の建設に邁進致し度いと存する次第であります。(終)

る。

我が御内閣十数年、常に榮れ相談されたりと不思議である。御子十数年勤められても、王位不承認の御意を御存じ御理解する御意を嘗て嘗て御見聞された。御内閣十数年勤められても、王位不承認の御意を御存じ御理解する御意を嘗て嘗て御見聞された。御内閣十数年勤められても、王位不承認の御意を御存じ御理解する御意を嘗て嘗て御見聞された。

この御内閣十数年勤められても、王位不承認の御意を御存じ御理解する御意を嘗て嘗て御見聞された。

### 通力こ正信解

#### 儀部　満事

佛典を拜讀するとよく「五六通の羅漢」といふことが出て居りますが、三明といふのは、過去のこととに通達せる宿住智證明と、現在のこととに通達せる漏盡智證明と、未來のこととに通達せる死生智證明を申します。又六通とは六種の神通力であります、一には天眼通としてどんな遠方でも照して見る力、二には天耳通とてどんな音でも聞き分ける力、三には他心通とて他人の心を皆了知する力、四には宿明通とて一切の人々の前世の事を皆知る力、五には神足通とてどんな所へでも自在に行き得る力、六には漏盡通で漏とは煩惱のことですから一切の煩惱を斷ち盡す力であります。

此等の通力は釋尊は無論のことお弟子の菩薩や阿羅漢達は皆備得されてゐることであり、例へば法華經五百弟子品中の『大神通を得て、身より光明を出し、飛行自在ならん』とか、寶塔品の『爾の時に四衆、大寶塔の空中に住在せるを

軍人勅諭  
(明治十五年二月詔)

(前略)

夫兵馬の大權は、朕が統ぶる所なれば、其司々らこそ臣下には任すなれ。其大綱は朕親ら之を擅り、肯

て臣下に委ねべきものにあらず、子々孫々に至るまで、篤く斯旨を傳へ、天子は文武の大權を掌握する

の義を存して、再び中世以降の如き失體なからんことを望むなり。

よし。御内閣十数年勤められても、王位不承認の御意を御存じ御理解する御意を嘗て嘗て御見聞された。

の神變を現じて親の邪心を醜せしめた事もありますから、人情は今も昔も一貫したものがある譯でせう。然らば夫ではそんな神變不思議なことを其まゝ鶴呑にするのか、随分單純なお目出たい話だといふ論難が起るでしやうから、お互の水かけ論よりも現代人の演じた通力の實際を左に御紹介して御参考に資すると共に、益々正信解に精進して頂きたいと思ふ者であります。尤も自分は直接この不思議の人師にお目に懸る機会はなかつたのですが、其人と幸にも數年間起居を共にせられた陸軍大佐大橋博吉氏を最近友人と同行して親しく其の實例談を聞き、又更に福島飯坂の石塚直次郎氏からもその體驗談を承り、現代人には奇蹟だとか不思議とされる事も、別段不思議とするに當らぬ寧ろ當然あり得べきものを感じた次第であります。

却説其當人は高橋宥明といふ明治大正年間のお坊さんで尤も何宗に歸属したといふことはなく、一箇の乞食坊さんの様な流浪の身であつたから殆んど世間の人々は知らないのです。それに三方山で圍まれた田舎の坊さんですから愈々知られません。即ち山形縣萩の出生で、お父さんは莊右衛門と云ひ、其の四男で俗名を道四郎と呼ばれて居たのです。若い時、家の用事でそれ程遠くない上の山温泉場に薦買ひに行き、歸りに崎に來ました時、岩の上に白鬚の老人が居つて『オイ俺は上の山に行きたいのだが、腹痛だからお前

負ふて行け』と云はれ、根が純朴な若者ですからず素直に『ハイ／＼』と蓮を其所に置て、老人を負ふて再び上の山に下つたが、此所でよいと云はれて其處へ老人をおろし、又再び時に上つて前の處に着いたら、老人は既に自分よりも先に其所に居たので、驚いて頭を下げたら突然『之を喰へ』と何だか妙なものを口の中へ押込まれ其健氣絶をして、暫く人事不省だつたさうですが、不圖氣の付いた時には老人は既に居らず、併し懷中に巻物を入れてあつたけれ共梵字で誰にも讀めない。寝る時それを懷中して床に就ぐと夢に一つ一つ教へられて遂に全部を覚えたのだと當人は大橋大佐に物語つたさうです。

それでいろいろ不思議を演ずるには、御寶が來た時に出来るんださうで、其の御寶とは幅が六分計りで長さは三尺位の袋紐で、兩端に直徑三四分位の珠があり、紐の色は時々違ふのですが、これが二の腕の所をくる／＼廻つて居る。さうなると平素とは別人の様な態度になり、二重瞳孔の眼が微動を始め、五體が微妙に震動して來ますから側に居てよく解るさうです。普通の時はいつもボンナリして一見馬鹿のやうですが、それでなか／＼機敏だつたとの事です。始め大橋さんが山形聯隊に奉職されてゐた時、いつも通り午後六時頃下宿に歸れますと、スクツと縁先の庭に緋の衣を着けたお坊さんが、ニコ／＼して立つて居るの

で『マアお上り』といふと『明日又來る』と云つて立ち去つてしまふたさうです。其の前に大橋さんの中隊附軍曹に佐藤さんといふのが、大橋さんに『不思議なお坊さんが時々私の家に來て授筆をします』といふことを話したさうですが元より信することもなく心に深く止めずに軽く聞き流したことと思ひ出して、そのお坊さんだらうと追想されたのです。

翌日も例通り晩六時頃に下宿に歸られると、當時大

橋さんは、隊長から陸軍大學校の試験を受けるべく命令され居られたが、勤務後仲間の二三人と戰術研究に就て大論戰を交へて歸られると、昨日のお坊さんが坐り込んでゐて煙管で烟草をふかしつゝニコ／＼し乍ら『お前は今日心にもない事を議論したネ、併し前的心は他の人達と同じ心で居りながら懲りと反対したのだからよいが、あまり心にもない事をしやべるのは宜くないよ』と云ふ、これが初對面の挨拶だつたさうです。是は事實に適中して居たので、大橋さんも成る程不思議な坊さんだナ、第一往復の途中も何だか普通ではないと感じられたさうです。夫から『お前の所に來て居てもよい』と申しますから、『宜しい、晩食には何を喰べますか』と尋ねられると『輕節の入らない味噌汁と漬物の外は喰べない』と云ふので、二人は同一のお菜で食事を済まし疲れた。これが習慣になつて大橋大佐は今日でも味噌汁には輕節を用ひられない。

呉れた、お蔵で随分危険な所に行つて同伴の者は射殺された時も、自分は狙はれなかつたのは、そのお守りの爲だらうと思つて居ると話され、實物は現在大佐の御子息が持たれて、〇〇方面で活躍されて居るさうです。

更に大橋大佐は話を進められ、宥明師の飛行自在なことを述べられました。或る時宥明師は聯隊に遊びに来て、梁木に下駄ばきの儀揚子を登りますから、危ない／＼と注意され、安村聯隊長も少し離れた所で見て居られたさうですが、宥明師は梁木の中程の處で飛び下りました。アツ危ないと思はず呼ばれたが、其儀宥明師の姿は見えなくなつてしまひ、私も驚いたのですが、聯隊長も不審にされて居たそこで私は直ぐ下宿へ歸りますと、宥明師は既に火鉢の前で煙草をふかし乍ら、私を見ると『ドーダ聯隊長さんは魂がけたろう……』と云ひ、而して『ドーダ飛べるだらう』と申したさうです。こんな空中を飛ぶことは屢々ありますとして、山形から東京へ飛んで來たり、市中を飛行すること位は何でもないらしいのです。これは獨り宥明師に限らず、嘗て米澤市の龍日寺の住職が、夕食後毎晩不在となり、朝は必ず寺に居るので、小僧が疑を起して『方丈様は毎晩何處へ行かれますか』と伺ひますと、『菴を打ちに行くのだ』と云はれたので、小僧は『今晚私も連れ下さいませんか』と頼みますと、夕方小僧を呼んで『俺の背に確かりつかまれ、

而して眼を閉ぢて居れ』と云ひ、暫くして小僧が眼を開いた時は、和尚は既に見知らぬ他の和尚と碁を囲んで居たさうです。横で見てゐた小僧はねむくなつて遂に寝てしまつた。翌朝醒めた時は全く知らぬ所でウロ／＼して居たのを昨日の和尚が『目が醒めたか、お前の處の和尚が歸る時に小僧が起きたら此金を渡して汽車賃だから、これで歸つて来る様にとの事だから』とお金を渡され、驚いて此處は何處ですかと聞くと、鶴岡市の善寶寺だつたさうです。此等を思へば飛ぶことはさう面倒でないらしい、何時の時代でも修行に依つて空中飛行も出来れば、戸締のある室内へも自由に出入は出来るものなんで、但し邪念の起つた時は勿論駄目です。

そこで宥明師の得意は授筆であります、その仕方は書いて貰ひたい人は、唐紙なり、半紙なり、何紙でも軽く卷いてそれに帶封をして、人が其前を横切らない所に寄せ掛け置けばよいので筆は其家か又は他所で時期よしと見た時に投げるのです。何でも頼んだ人の名を唱へつゝ投げるらしい。筆は水筆でも眞書でも何でも宜らしい、其先端に一寸墨を染めて三四尺前方に投げます、すると其の筆先が前方に向きますと書いてある知らせだと之です。紙は大小に拘らす一ぱいに書いて居る。字は多く龍の草書で、その運筆に於て一つの特異點を示して居ります。

或時大橋さんの妹さんが紙を巻いて床の間に立てかけ、宥明師に手を持つて貰ひ『夫れ投げろ』と云はれ、縁側に筆を投げて書けたさうですが、これは懸輪として今も所持されて居ります。而して此等を開眼する時には、宥明師は其前に水を入れた小井を用意させ、新しい筆を一本側に置いて自分は舟を焼き渡すたる坐禪の姿勢で暫く袖の中で印を結んで居ますが、やがて額から汗が流れる様になつた頃、筆に水を含ませて恰度不動尊が劍を持つた様な形に筆を持ち、水を天々前後左右にバラ／＼と振りかけ、夫れから筆を大きく左右に動かしますと、不思議にも軸でも額でも筆に従つて動き始めるのです。これを見た夫人達は氣味悪がりますよと語られた。こうした龍の軸は現在でも生きて居り、時に奇蹟を現はすさうです。

其他宥明師の雨降りに雨具なしでも濡れないことや、降りさうな雨も暫く止めさせたり、又福島に行つた時、渡舟の出た後で急ぐ用の爲に舟の歸着を待ちかねるのと、一つには渡錢のないことから阿武隈川の水面をアレヨ／＼と云つて見て居る間にスクコラと歩いて向ふ岸に渡つたりしたことや、品物や人間を自由に手元に引き寄せるこことや、他方に起る火事を知ること等細々話された。又カン／＼とおこつた真赤な炭火を半紙に包んで、臺所から坐敷の火鉢へ運んだりすること、或は宥明師の身装を卑んで、侮蔑したことなどと申されたが、俗物は駄目だよと對手に

り、行動を防害したりせる者は現罰で苦しめられた實例も話されたが、繁ければこれ位に留めます。  
此等は獨り大橋大佐丈けのお話でなく、其の令妹満恵子さんも、又京都の木原操院師もよくご存じの事柄です。加之飯坂の石塚氏は過日お訪ねした時、宥明師得意の授筆は自分で氣の向いた時は出来ますよ、さう面倒ではあります、恐らく誰れでもその気になればやれますよと話され其他の事に就ても別に不思議がるに及びません、當然出来ることばかりです、但だ吾等の煩惱貪欲熾盛なるが故に真に偉大な靈力を充分發揚出来ないことをツク／＼感じますと云はれた。この石塚氏は青年時代渡米してアメリカで工科を勉強され、歸朝後鐵道省の技師長として永く勤められた方ですが、現在は退職静かに老後を山野に自適されて居ります。

宥明師の俗人離れした悟道は全くその無欲と無瞋からで他家に呼ばれて話をしたり、授筆をしたりすると相當のお布施を貰ひますが、歸途可愛想な人に遣ふと呼び止めて、今貢つたばかりの包そのまゝ與へてしまひ、何時もお金は一錢も持たれない、それで何等不自由はせないさうです。又ドンナに人から惡戯されても腹立てず、いつもニコ／＼して居たさうです。ある日大橋大佐が、自分にも一つ秘傳を教へて呉れんかと申されたが、俗物は駄目だよと對手に

して呉れないとの事です。畢竟貪欲、瞋恚、愚痴の三毒を滅した人は、其處に或る通力を得らるゝ事なんでしやう。それから大橋さんが「どうです地獄とか極樂とかいふものはホントにあるのですか」と聞かれますと、「ソレはあるサ」と言下に答へ、「一つその地獄を見せて貰へんか」と云はれた時「地獄は見るでない、極樂の方がよいぞ」といふことだつたさうです。

翻て末法の大導師である日蓮聖人は「利根と通力にはよる可らず」とも「専ら正理を修行したまへ」「佛法とは道理なり」等仰せられて、かゝる通力小乗の覺りより更に進んだ大乗の域に達し、更に大乗の中でも實大乘、法華一佛衆に於ても本門の所謂最尊最上の妙法蓮華經の七字五字の信受口唱に依つて、私共の人格完成を理想とせられ、以て世界平和の佛國土建設を目的とせられて居ります。即ち如來壽量品のは好良薬の妙法蓮華經を一心清淨に受持することで常樂我浮の佛身を成する次第ですから、敢て六通の羅漢も遂に釋尊の無始久遠の本佛で在しませることを知られなかつたことは惜しい、従つて大正三年七月に他界されたが果して佛果を成せられてゐるかに想を飛ばすに御同情に堪

えないものがある。其處が佛徒として、又人間としての大問題であります。法華經を拜しますと、浮藏浮眼の二子の演じた神變不思議は、父王の邪心を轉向せしむる一方便に過ぎなかつたのです、其目的は父をして眞に佛陀の妙化に溶せしめ成佛の允可を得ることでした。然るに世間では成佛といふことよりも、目前の神變に腰を抜かす者が多いのりますまいか、禪宗の云ふ月を見ずに指を見て居る者が多いからでせう。さればと云つて宗教家が近頃の様に世間に迎合する如きは、全く大きな堕落であります。

教主釋尊の睿智を以て衆生救濟の爲めに五十年間の御説法は、決して私共の機根が中心ではありません、應病與藥は一つの方便であつて、名醫は保健法を教へて人々を無病健全にすることであります。それでから、釋尊は飽迄も教法中心であり、神變不思議といふやうなことを現じて俗人を驚かす如きことは成されない、唯如何にして人々を苦の中より救ひ、安穩の樂を與へらるゝかに就ての一舉一動が、時としては私共の想像外の點に及ぶ時に奇蹟だと思いますのでせうが、奇蹟とは一體どんなことなんでせうか例へば日蓮聖人が雨を降らせたとか、龍の口では江の島の方から光りものが飛んで來たとか、佐智のお宿で梅の木に空から星が下りたとか、佐渡行の時海上の波題目だとか、

坂原三昧堂の嚴冬に數日の絶食でも平常と變らぬ事共を指すならば、そんなことは宥明師の行狀に照しても當然あり得べきことで、制段不思議がるに足りませぬ。即ち御經文に依れば日蓮聖人は阿羅漢の悟りを超え、菩薩でも迹化他方の菩薩でもなく、實に本化地酒の大士であらせられたのですから、宥明師とは比較にならぬ數段も上位の聖者で在します、隨つて古來難解とされてゐた八萬法藏といはるゝ佛教の精要を把握し、末法の大導師たる權威もある譯でしやう、本經に示して「如來の滅後に於て、佛の説く所の經の因縁及び次第を知つて、義に隨つて實の如く説かん、日月の光明の能く諸の幽冥を除くが如く、斯人世間に行じて能く衆生の闇を滅し、無量の菩薩を教へて畢竟して一乗に住せしめん」とある。寔に克く日蓮聖人の御人格を指摘されて居るではありませんか。而かも法華經は經文の通り極めて信じ難く解し難いのであります。「斯人」なればこそ如來の遣はす所として如來の事を行じ得られたのです「無量劫より來た、而も菩薩の道を行ぜり、難問答に巧にして其の心畏るゝ所なく、忍辱の心決定し、端正にして威徳あり十方の佛の讃めたまふ所なり」と、釋尊は日蓮聖人を稱讃されて居ります。祖書を拜しますと、末法に於てこの唱へ難い御題目を唱ふるものは、過去に十萬億の佛を供養せるもの、此經に遇ひたてまつりて信をとると見えたたりとも、

地通の菩薩に非らずんば唱へ難き題目なとりも仰せられて居ります。私共は幸にも宿世の善縁によるか、この無量劫に於て名字をも聞くべからずの妙法を口にし、一眼の難の浮木の孔に遇ふなるべしのお題目を戴くとは何と有難い恵まれたものではありませんか。「是の故に智あらん者、此經の功德の利を聞いて、我滅度の後に於て斯の經を受持すべし、是の人佛道に於て決定して疑ひあることなけん」の本師釋尊の仰せは、私共でも四德佛攝置を成就せる佛様になることの授記ではあります。この歡喜法悅こそ物にも換へ難いお寶であり、大奇蹟でしやう、大不思議です。顧みて其信心の力弱さ、妙法蓮華經の唱題の微かさ、本心を失へる淺間しい姿を見ては堪りません、薄徳で邪疑深い浅識の身にも、宥明師の如き現代人の通力の實例に鑑み共に「佛口所生子」の自覺に立ち退つて、祖師の通り正直に經文を信受し、極力道念を策励して、大聖の御跡を追りせめて其一沛一微塵でも四恩報答に擬したいものであります。これでこそ宥明師も定めし感謝される事と確信し、聊か御回向の一掬と致します。

(記) 事

本部團報

興亞奉公日 十月一日朝六時から講堂に於て本團員、酒悦立正青年團及び東運立正青年團員約五十名と俱に勤行、皇軍の武運長久と陣歿者追憶に向し、後一場の法話を礎部常任理事より承り終つて朝食後埼玉縣豊岡町に出勤し、繁田家系統の青年團と合流して更に修法と講演あり、午後より豊岡小學校庭にて體育獎勵の運動會あつて、愉快な意義深い一日を過した。

御會式 十月三日から九日迄の一週間は銃後援強化週間に相當するので、其第六日堅忍持久の日が日曜日となることから、午後二時を期し日蓮聖人の非滅現滅會式典を營み、且つ皇威宣揚と、戰死者、傷病及び出征軍人に對する感謝の法要を修了して引續き礎部理事の開會挨拶から直ちに岩野少將の『榮國理想と皇道』に就て前回の續講を約一時間半に亘つて講述され、我國體の生命、皇祖敬神の道統永劫不變なることを明かして、法華經の金文と全く冥合せる知法思國の精神を高調されたことは洵に時宜を得たものと大衆は甚大の感激に溢れた。

御書講座 摂時鈔の講議が例に依つて小林先生をお煩はせして、毎火曜日の晩に開かれて居る。但し二十四日は都合に依り臨時一回丈け休講。

日曜清集 『行學二道を勵み候べし』と大聖人は慈誦を垂れられて居る、午後二時より五時頃迄永道の士女一堂に會して精進を續けられる、有難い姿であるまいか。

清集 二年振りで本部より礎部理事をお迎へして、本部の其後の動靜を聽き又當方の近況を御報告することを得た。前日迄は強風雨の襲來に氣遣はれて居たが、十八日の當日は不思議にも早朝より日本晴で中秋の碧空を仰げる中に礎部先生は三國時代の陰惡跡を省察バヌで突破され、午後四時半頃お元氣な姿を萩市驛に迎へ、直ちに小高先生のお宅に少憩され、夕刻會場に當てられた増野病院に入られた。始め妙蓮寺にしやうかとのお談もあつたが、夜分でもあり聽衆の關係もありして遂に増野先生をお煩はせすることになつた。

午後八時過、富元上人の導師で修法を營み、終つて小高先生

生起つて懇切な御紹介あり、やがて礎部先生は『現代を教ふもの』と題して、日蓮聖人の御會式の聖月にこの護法勤王の國士を世間では讃仰の聲高いけれ共果して精神的に大聖人を理解し渴仰せるものどれ程あるかと先づ如來使の權威を高調され、佛教の二大學派より開顯統一の妙旨に及んで、大聖人の至誠と三達徳を歎じ、法華經の經王を知るには教相判釋を辨ふべきことを指摘され、進んで人身觀上互具の妙體佛性顯動から法界の圓慈觀、法佛不二の佛身を述べ、妙法蓮華經の七字五字と本佛釋尊の不離の關係から、遂に是好良薬の御題目こそ最も現代並に將來の全人類を救濟すべきものなりと力説された。一部の御婦人達には若干重荷の様に感ぜられたが平素行學會に聚るものとしては意義甚深その時間の短かきを惜まれた。

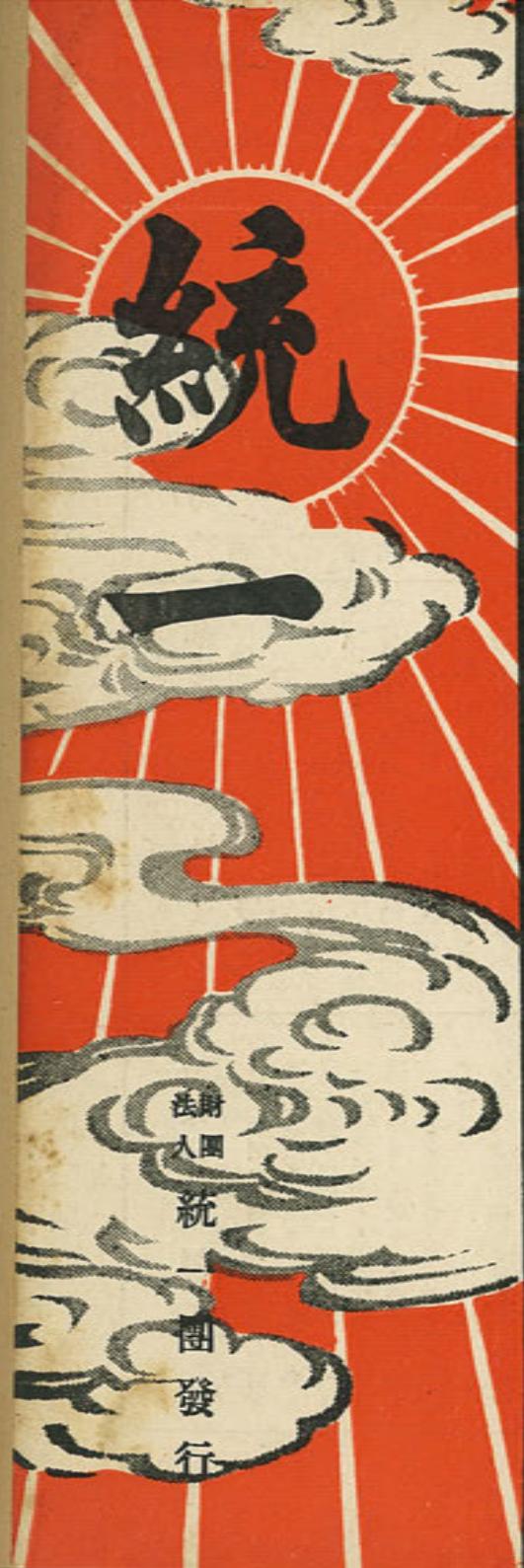
引續いて座談會に移り從來一度も耳にしなかつた神祕的事實談に、科學や知識に信頼せる吾等に採つて信仰上の一大暴風雨の感興に、三四の質議もあり、最近の機會に之を統一誌上に掲載して頂くことにお願ひして閉會を告げたのは、將に十二時に垂んとする頃であった。

十月十三日夜 於中村様宅 日蓮聖人が身延山に入られた時の御書の中に、又釋尊阿含經の中に「異體同心」と云ふ事が書かれてあるが、我々は互に相和し力強くなり成果が擧る様に互に心を合せて一つの目的に向つて行く事が最も大切な事である、自我にとらわれず精神的に同一水乳の如く世に處して行かねばならぬのである。この様に御書を通じ日蓮聖人の御人格を通し法華經を拜する時、始めて法華經の尊さがわかるのであつて、我々は信仰の上に於ては釋尊を中心には結び付き恵々として世に處して行かねばならぬと先生は御説き下さつた。



# 次 目

聖訓摘要	.....	本
開目鈔講話(承前)	.....	小
肇國神話(二)	.....	岩
本尊論破邪篇(一)	.....	河
常非常時に際して	.....	池
記事	.....	
田合野林多	.....	
新陟直一日	.....	
一明英郎生	.....	



號月二十 年四十四第

15/6~17 3